

革命理論としてのキリスト教およびマルクスとニーチェの理論

東方 淑 雄

19世紀の大思想を壊したニーチェというアンチ・クリスト

いまでは死語になっているかも知れないマルクス主義哲学という、資本主義を否定し打倒してプロレタリア革命を実現させるために、人と社会または諸集団はいかにあるべきかを理論的に追究する学の理論家であった梅本克己氏が、1967年に刊行された『唯物史観と現代』の冒頭を、「20世紀は19世紀風の大思想体系の崩壊過程だといわれる」と書きはじめられ、マルクスが「破局的な恐慌が生み出す社会情勢の中での労働者階級の運動によって、資本主義は崩壊する」といっていた予測が20世紀において反対に資本主義は発展・強化しているのに対し、革命によって成立した共産主義がかえて前近代的独裁国家をつくっていることを含みとしながら、厳密な意味で予測が外れたことが判明しているので、崩壊しているのはマルクス主義理論の方だといいかねないような考察をされ、さらにマルクスに対比して反キリスト教・反マルクス主義的立場をとる「生の哲学」者といわれるニーチェが20～21世紀にはニヒリズムが到来すると提起していた予見の方は的中したという。まったく異質論理の成果を対峙させて、マルクス・マルクス主義批判を強化していたのであった。

マルクスの資本主義崩壊理論の方はよく知られているので後述するとして、ニーチェのニヒ

リズム理論の方をまず瞥見しておく、ニーチェは19世紀ヨーロッパにおける精神界・思想界および道徳的規範などが現実的な活動を弱体化させ、荒廃・危機的状態を呈している世界を指して「神は死んだ」という断定をし、そのような社会・思想の荒廃・危機・混乱の状況が持続的に展開していく結果としてニヒリズムが到来するという予言の方は、さまざまな意味で世界大戦・大恐慌・革命など破局的事態がうずまくようになった20世紀の世界は、ある一つの統一的理念を原理として体系化された理論によって、解明されなくなって、「19世紀風の大思想体系が崩壊」している不条理な現実が出現したのでニーチェがいていた「最高の諸価値が無価値になる」ニヒリズムに覆われるようになったといえるので、こちらの方は的中したという論理を展開されていたのであった。

ところで、21世紀になった現在にあっては、マルクスが理想社会の建設を目指した革命が起きる、あるいは革命を起せよといっていた主張は、内容を問わないならばそのとおりに現実化していたので、その予測は見事的中していたにもかかわらず、いくつかの国でのマルクスの理論を信奉する共産党の主導による革命はとんでもない共産主義なる体制をつくったうえ、ご丁寧にも20世紀末にはそんな体制さえ崩壊させているので、ニーチェのニヒリズム到来の問題は措くとして、梅本克己氏のこのようなマルクスが予測をはずしたという考察は間違いではな

かったことは確かであったが、ただ1967年というすでに'70年安保闘争なる騒動が開始されていた時期の、日本の社会思想に関する理論学界あるいはアカデミズムにおいてはマルクス主義理論がまだ圧倒的に優勢であったから、19世紀最大の社会思想家・経済学者・哲学者のマルクスの20世紀への理論的予測がはずれたというだけでなく、こともあろうに19世紀きっての異端の反マルクス主義的哲学者のニーチェ（ヒトラーの思想的源想とさえいわれていたのである：水田洋『社会思想小史』）の予言が適中したなどという対比的指摘は、当時の理論的常識とは反する考察だったから、おそらくマルクス主義哲学者梅本克己氏の『唯物史観と現代』におけるこのような異質すぎる二つの理論を対比した部分は多方面から批判されたに違はなく、1974年の第2版の改定に際し梅本克己氏は20世紀へのマルクスの理論的失敗とニーチェの予見的成功ともいえる対比的考察は削除されて、マルクスのみ視点に当て、もっとも正確に世界の歴史・社会および経済を科学的・法則的に把握していると考えられていた理論体系が、なぜ時代の変化のなかで予測をはずしたのかという根拠・理由だけの追求の方だけに論点をしぼられるようになる。

19世紀のマルクスの理論が20世紀になってから変革した現実

35年も以前になる1974年に梅本克己氏は『唯物史観と現代（第2版）』を著わされ、実際に20世紀になってから共産主義・社会主義革命によって出現した社会がマルクスの理論とかかわりなく、いわゆるスターリン体制や、毛沢東体制とでもいったマルクスが否定してやまなかった資本主義社会より古い時代の前近代的封

建的な独裁的国家が形成されてしまっていることの方を詳細に検討され、また第2次世界大戦以降のマルクス主義理論の方も現実から遊離して非生産的・教条的に硬直化しているなどの退廃的事態が指摘され、加えて日本でのマルクス主義理論や革命勢力が分裂をくりかえし内部抗争を続けている状況の分析も付け加えられながら、1970年代になっても他の理論に比べまだ優位性を保持し最高の理論体系であったはずのマルクス主義・唯物史観の理論的立て直すため、当時存立していた共産主義体制なるものと本来のマルクスの理論と分離をさせてと現実的有効性の回復の課題の方に論点を移行させようとしているのを見ることができるのであるが、そこではニーチェが提起していた神の死によりニヒリズムが到来するという単純な予言は的中したという論理的記述は削除されているのであった。

ちなみに『唯物史観と現代（第2版）』は梅本克己氏の絶筆となるが、初版の方でニーチェのニヒリズム論に対比させてマルクス理論の限界の指摘と崩壊の危機の解明、そして第2版での理論の現実有効性の回復を試みた理論的営為の先駆的意義は、40年以上もたったいまではマルクス理論再生の優れた試みと評価されることは確かであるとしても、その考察・解明に接するといまマルクス主義理論体系があまりに無残に崩壊しているのに回顧的驚異を受けるとともに、「神の死」に匹敵できる「マルクスの死」もニーチェの予言のつづきとして、さらなる深刻なニヒリズムの到来につながっていくということになるといってよいであろう。

（日本のマルクス主義理論一般は、第2次世界大戦後から1980年代の経盤まで、社会科学理論や社会思想の領域で圧倒的な影響力をもっていたのであったが、マルクス主義理論の内部

はいわゆる極左暴力主義・過激派から構造的改革派・修正主義まで、さまざまな立場に分裂して論争や、政争あるいは内ゲバまでくりかえしていたのであったが、梅本克己氏はかなり孤高のマルクス主義哲学者だったから、当時のマルクス主義を危機として把握されていたという。だから1977年『梅本克己著作集（第5巻）』の月報で関二郎氏は、梅本克己氏は「正統マルクス主義」を超えて、「現代マルクス主義の危機の深さを洞察していた数少ないマルクス主義者の1人だった……けれど、たとえ原マルクスを完全に復元したとしたとしても現状のマルクス主義がぶつかっている問題を受けとめる視角は出てこない」と、氏の理論の先見性と限界を指摘されていたのであるが、このころからマルクス主義は日本国内においても、世界的にも坂をころげおちるように救いようもなく崩壊に向っていくのであった。）

つまり、梅本克己氏が提起されていた「20世紀は19世紀風の大思想体系の崩壊過程」であるとする論理に即してみると、19世紀から20世紀にかけて、その理論的影響力を維持したまま生きのびていた代表的な大思想はマルクスであり、もう一人あげるとすればニーチェといえることができ、20世紀全体をかけて崩壊していったのはマルクスの思想と理論の方だったのであるが、梅本克己氏がみていたときはまだ崩壊がはじまったばかりであった。

ところで、マルクスはすでに19世紀のまだ興隆中の資本主義の矛盾・欠陥を鋭く見抜き、内部階級闘争の激化と恐慌の周期的発生を受けてその体制は崩壊に向かい、窮乏化・商品化・非人間化されている労働者階級が覚醒・団結して資本家階級の生産手段・資本の私的所有を社会の共同所有に変更する革命によって、必然的に共産主義社会を到来させるという主張をし

て。否定評価する資本主義社会を新しく共産主義社会につくりかえる理論を、全世界の存在のすみずみにいたるまで及ぼし、それぞれの個的存在のあり方から諸個人それぞれの生き方にいたるまでの詳細な解明と規制とを同一論理・同一基準を貫いて展開したうえで、プロレタリア革命達成を中軸におく一大思想を構築していたのであるが、典型的な19世紀風な大思想体系であるヘーゲル哲学（およびコント社会学）を超えるものだっただけでなく、20世紀になってもこのマルクスの理論体系を正義・真理と信奉する世界中のきわめて大勢の人びとが反体制運動や革命運動に参加してきているという、宗教以外には考えられない人を動かす威力を発揮しつづけてきていたのであるから、20世紀全体を通じて崩壊していったのは、じつはマルクスの理論そのものであったといえることができよう。

この同じ時期の事情について、カーター政権の特別補佐官だったブレジンスキーは『大いなる失敗（1990）』を著わして、第2次世界大戦後は世界大戦や大恐慌などの「混乱状態への反動から、社会活動も経済活動も政治に左右される時代に入った。この新しい主流派のなかには、ソ連の現実が、理想から大きく逸脱していることに気づいている者も多かったが、かれらとてソ連の体制に理想を達成する可能性が残っていることは、まだ疑っていない。ソ連が一旦成功したかに思われた結果、20世紀は共産主義が台頭し、人々を引きつける時代に入ろうとしているように見えた。この間アメリカは超大国として押しも押されもしない立場を築き、アメリカ式の生活が大きな魅力を振りまいていたにもかかわらず、アメリカは歴史の流れに逆らって、むだな抵抗をしているように広く思われていた。……しかし、誕生して100年

とたたないうちに共産主義は影が薄くなってきた。」という考察をしていた。ところで梅本克己氏が『唯物史観と現代』を著わしたころはまだマルクス理論やマルクス主義が限界をみせつつもソ連とか中国の体制は生きていたし、日本のマルクス主義を名のる勢力も安保闘争なる騒動を起こしていたが、梅本克己氏が亡くなってから20年足らずの後、20世紀の終りにはその論理のとおりマルクス主義理論に依拠してつくられていた共産主義体制・資本主義体制内部の革命勢力、そして革命理論まで崩壊してしまった事情は説明するまでもないであろう。まさに「20世紀は19世紀風の大思想体系の崩壊過程」だったのである。(これと対比された最高の価値をもつ神の死により価値が無意味となるニヒリズムが到来するといった予見は20世紀全体の性格をいいあてたという梅本克己氏の指摘は後述するが、この関連からするならば信奉者には絶対的価値をもっていた「マルクス主義の死」も21世紀に新しいニヒリズムを到来させるといった類推が許されるのではないかということなのである。)

日本の1960年代から70年代という激動期の社会理論

ところで、1967年とか1974年という時期に梅本克己氏が『唯物史観と現代』という書名の著作を改定までして刊行されて、マルクス主義理論のあり方をなぜ執念をもって検討されたかという事情をさぐってみるならば、一つには1960年と1970年前後にそれぞれ通称60年安保闘争と70年安保闘争と呼ばれる日本史上空前の反政府大騒動が起きたことがその背景にあったことは確かである。とくに60年安保闘争のあと、まさにその騒動がマルクスがいていた

ような、破局的事態が「生み出す社会情勢の中で労働者階級の運動によって資本主義は崩壊する」という状況が出現したかと考えられていたにもかかわらず、運動の中核体だったマルクス主義勢力、左翼運動体が分裂して相互に非難・攻撃しあい、もっとも主要な攻撃の対象である保守政権に打撃を与えることができず、かえってその体制を強化させる結果になったので(その後、自民党政府は高度経済成長政策をとり、その成功によって政権をゆるがさないものにしていく)、闘争敗北後分裂していた左翼勢力の間でさらに激烈な論争が起きあがり、とくにマルクス主義のあり方をめぐっては、のち殺し合いがなされるほどの論争・抗争まで展開されるといふ混迷の極みのなかでのマルクス理論再生のための発言だったのである。

さらに、梅本克己氏には個人的事情があった。1965年、丸山真男・佐藤昇両氏との60年安保闘争後の左翼勢力の思想とその活動状況を鳥瞰的に批判考察する座談会(『現代日本の革新思想』)で、折から60年安保闘争をもっとも激しく戦闘的に活動した当時の全学連主流派＝共産主義者同盟の強力な指導的同調者であった清水幾太郎氏が、突然反左翼的発言をするということがあったのに対して、マルクス主義と離れたり捨てた人びととならべて、「私は思想というものは、それをえらびとる時だけでなく、それを捨てる時にも原理をもっているものだと思う。むしろ、捨てる時にこそ原理が必要だと思う。……そこで清水さんは、清水さん自身が今まで依拠していた思想的原理との対決をどんなふうに行ったのかみせてくれない」という批判的発言をされていたことがあったのであるが、その翌年の1966年に清水幾太郎氏は、この批判に答えるかのような、いや答えをはるかに超えた画期的な名著『現代思想(上・下)』

を刊行され、「私にとって興味があるのは、20世紀が、19世紀風の大思想体系の崩壊過程であるという事実である。」として、あきらかにマルクス主義を指して「当面、我々は大思想の分解を正面から認め、それに堪えて行かなければならないと思う。日本に関する限り、ニーチェの謂わゆるニヒリズムの時代は漸く始まったばかりである。」という西欧先進諸国と対比した社会思想的時代区別とでもいうべき論理を提起して、それまでの思想的原理の変化を19世紀から20世紀にかけて検証され（安保闘争という体験と重ねあわせて）、西欧の社会思想と日本の現実・思想状況とが乖離することを論究されていたのであった。

清水幾太郎氏はみずから『現代思想』を「本書は3章から成っている。第1章は、20世紀初頭を取扱う。この時期の芸術家を先頭とする天才たちの精神的冒険は、リアリズムの否認およびニヒリズムの宣言という方向を含むことによって、20世紀の全体に向けて予言的な意味を持っている。第2章は、大事件の充満する1930年代を取扱う。もとより、事件とは問題であり、思想は、問題解決の能力によってテストされる。この10年間は、多くの思想が、一瞬、栄光の高い地点へ押し上げられ、やがて、深い谷底へ転げ落ちる時期であった。ニヒリズムの実現の時期であった。第3章は、1960年代を取扱う。この時期は、一面、既に若干の決算が行われているように見え、また、他面、予想の或る手がかりが得られているように見えるからである。」というはしがきのもと、19世紀という一定の安定と豊かさのなかで確立・成熟していたリアリズム的芸術、体系的哲学、科学的社会主義のそれぞれが20世紀の初頭に安定への不満勢力、あるいは革新勢力などの反対運動や対立理論によって存立根拠を否定・変革さ

れ、20世紀はシュール・リアリズムとニヒリズムおよび修正主義（ここは断言されておらず、ユートピアの復権ともいわれる）といった不安定な三者の時代に変質していることを叙述されているのであるが、このように19世紀から20世紀にかけて芸術はシュール・リアリズムに、哲学はニヒリズムに、社会主義は修正主義に変質していったという理論的展開をされていた清水幾太郎氏の解釈は1960年代にはきわめて異色なものだったのである。

1966年当時の日本の社会科学に関する理論学界・アカデミズムは、いくつかの派に分裂はしていたものの、まだ完全にマルクス主義理論によって制圧されていたから日本の社会科学の理論はすべてマルクス主義の理論によって構築されていたので、清水幾太郎氏の『現代思想』は完全に異端であり、資本主義体制を利する反動思想の書であり、清水幾太郎氏はスキャンダラスな転向者とされるような思想的風土であった。

本来のマルクス主義の19世紀思想への解釈では、全世界を世界精神の自由に向けての弁証法的展開過程として、観念論的哲学大体系を構築したヘーゲルを頂点とするドイツの哲学が、フォイエルバッハの神学批判によって唯物論化されたあと、マルクスの弁証法を復権させる理論的活動により弁証法的唯物論が確立し、「共産党宣言」や「資本論」の論理が統合されることによりマルクス主義理論が確立し、それを継承したレーニンや毛沢東により、20世紀は共産主義体制が現実のものとして構築されているというのが、通常の世界思想史だったのである。ところが、実際にかかわられた戦後日本の左翼的運動やマルクス主義者の革命運動を忌避されるようになった清水幾太郎氏は、20世紀は芸術がシュール・リアリズムに席卷されていると

いう点だけは思想外の問題としても、哲学はニーチェに打倒されてニヒリズムに価値を破壊され、マルクス主義は科学的社会主義なるものが存立しないことが明瞭となっていたので、レーニン派の正統的社会主義ではなく、20世紀の代表は福祉国家につながっていく修正主義者のベルンシュタインをあげているなど（もうすこし重要な1930年代論、1960年代論は後述する。）1966年当時としては高名な清水幾太郎氏にしか書けない反動の書だったのである。

マルクス主義崩壊の予言の書について

このような論理をもった『現代思想』を梅本克己氏は「清水さん自身が今まで依拠していた思想的原理との対決をどんなふうに行ったかみせてくれ」といった手前、受け入れたということになるだろうか。『現代思想』刊行の翌年に「20世紀は19世紀風の大思想体系の崩壊過程だといわれる」という清水幾太郎氏の言葉をそのまま冒頭に置く『唯物史観と現代』を書かれ、ご自身マルクス主義哲学者であるとされているにもかかわらず、20世紀へのマルクスの予測は外れ、ニーチェのニヒリズム到来の予言は的中し、マルクス主義は崩壊しつつあるという論理まで受け入れられていたのであった。

それではまず、梅本克己氏も20世紀への予測をはずしたと指摘された19世紀風の大思想体系であるマルクス主義とも一括されるマルクスの理論とはどのようなものか改めて簡単にみておくと、内容的には唯物史観・経済学・共産主義の三者がそれぞれに理論展開しながら資本主義の否定的掌握という一貫した理念において三者が弁証法的に統一された理論体系をもち、人類の歴史社会の発展法則の理論的提起と現状社会の様式の史的立場づけ、資本主義社会の商

品の交換価値の経済分析およびその階級的搾取の本質の解明を通じて、被抑圧階級の規範的・意志的な理論把握を基礎に実践的指針を位置づけ、その総合的理論選択が指令する正義のプロレタリア革命によって、政治権力を資本家階級から労働者階級に奪取し、資本主義体制での生産手段の私的所有を共同所有に変更し、諸国民を古いくびきから解放して自由で平等でさらに豊かな生活ができる共産主義社会を実現させていくという、現実変革計画とその実現過程において、世界・国家・社会あるいは諸人間集団から諸個人一人一人にいたるまでの生き方・あり方・行為方式について社会科学的理論体系的において位置づけられ、倫理的指令によって決定づけられるという世界の隅々まで解明しつくすという、カトリック神学体系に匹敵する巨大な体系的論理が展開されていたのであった。

ただ、20世紀の一時期まで世界的に非常に多くの人びとおよび諸勢力さらに社会主義圏に属する国民が、「第2次世界大戦の終結から10年とたたないうちに、10億人を超える人々が共産主義の下で生活するようになった。ユーラシア大陸のほとんどすべてが共産主義になり、東の端と西の端の地域だけがアメリカの保護下にあった。世界各地にアメリカが資金と兵力を注ぎこんで、しばしその広がり食い止めてはいたものの、共産主義は前進を続けるものと思われた。（ブレジンスキー）」といわれているほどのものであった。）そして日本のアカデミズムにおいては、マルクス主義は真理・正義そのものが貫かれ具現されている理論体系、人間解放の政治党派の理論なのだと思われていたのであるが、20世紀の終わりには、とくに1991年にソ連共産主義体制が崩壊して以降は、だれもマルクスの理論が真理を体現している理論体系だとは考えられなくなっていることは確

かなので、マルクス主義理論家でありながら梅本克己氏は1967年に「マルクスの理論的予測はずれた」と断定をされたり、1974年には「マルクス理論は崩壊している」ともいわれていたのは、清水幾太郎氏の理論を継承した当時としてはきわめて異端的でかつ先駆的な指摘だったのである。つけ加えるなら、マルクス主義理論の悲劇の特徴はいずれの理論より優れた弁証法的唯物論・唯物史観および経済学を基礎におく完璧なまでの社会科学理論体系をつくり、その理論が規定している歴史的必然性・法則性において資本主義体制とそこに生きる人びとの生き方にいたるまで正確に完璧に捉えられていたにもかかわらず、その真理・正義のイデオロギーに依拠して組織された労働者階級が実現させる革命によって真の意味の理想的な共産主義社会を一度も創り出せなかったことにある。

(いまになってみると、「ソヴィエト体制は華々しい登場をとげた歴史の舞台から逃れるようにして消えていった。」という書きだしからはじめたフランソワ・フェレが、大部な著作『幻想の過去』の全体をかけて、20世紀はコミュニズムの幻想にふりまわされた歴史だったといっている意味も、意欲もよくわかるし、またかつてカーター政権の國務長官だったブレジンスキーが旧ソ連邦の崩壊を『大いなる失敗』という題にしてその体制の分析をし、「共産主義の下で起った事象は、歴史の悲劇以外の何物でもなかった。それは現状の不正を正そうとする性急な理想主義に端を発し、よりよい人間的な社会をめざしたのであるが、結果的に大量の抑圧を生みだすことになった。」という意味もわかるのであるが、1960～70年代はまだ社会主義体制の虚偽やマルクス主義の欠陥がまだよく理解されていなかったことをつけ加えておきたい。)

19世紀の哲学者ニーチェとはなにか

さらに、清水幾太郎氏が『現代思想』において、19世紀風の大思想体系を壊した最有力な哲学者の一人としてニーチェをあげ、その提起したニヒリズムこそ20世紀を貫く混乱を見事に予言していたという論理を継承した梅本克己氏の『唯物史観と現代』の論理的指摘にこだわるならば、マルクスが恐慌という資本主義の経済的破局を契機とする労働者階級の蜂起による資本主義体制を崩壊させる共産主義革命が到来するとした理論的予測が、資本主義体制は変質したものの消滅せず、かえって労働者階級が革命によってつくったとされていた新しい体制はスターリン体制をはじめとして、すべて人民抑圧体制しか出現させなかったので理想社会をつくろうと主張していたマルクスの歴史的法則ははずれたのに対し、アンチ・クリストの理論家といわれながらも、現実変革を理論の中核におく戦闘的なマルクス理論とはまったく質を異にし、主観的観念論として唯物史観あるいは共産主義思想の対極に位置し、全体主義的ファシズムに理論的根拠を与えたとさえいわれている特異な観念論の立場に立つニーチェをとりあげ、その思想の中核となっている世界の全存在の価値が無意味となるというニヒリズムが到来すると提起した論議の方は、20世紀になってスターリン体制を含むニヒリズム的状况が現実化されているので、予言としての的中したといわれているのであるが、マルクスの方は世界のすべての現実的存在を一貫した統一的原理により科学的法則的に掌握した大理論体系をつくり、その体系に照らして経済・社会・政治および倫理のすべてをあるべき正義の状況に置かれるようにさせたり、すべての人びとが平等で豊かに生きられるようにさせるため世界を変革させようと主

張する大思想体系を背景とする歴史的必然性の予測は外れたというのであれば、それと対比させられるほどの予言的中したとされる成功者で、自らアンチ・クリストを名乗るニーチェとは一体どのような思想をもっているのか、何者なのかについてもまずみておこう。

(先取りしていえば、三島憲一氏は『ニーチェ』において、「偉大な宗教社会学者であったマクス・ウェーバーは、現代において知的に誠実に生きようとする者が徹底的に対決しなければならない思想家がふたりいるが、そのひとりにはマルクスであり、いまひとりにはニーチェであると語ったと言われている。……マルクスは19世紀のヨーロッパ市民社会の作り上げた文化がイデオロギーにしかすぎないことを批判し、それを支えている資本主義的な生産様式を転覆し、プロレタリアを解放することをめざしたわけであるが、それに対してニーチェは、そうした解放の思想を支えている道徳的な価値観そのものを徹底的に批判するというかたちで市民社会に挑戦したのである。」という対比をされている。〈1987年〉)

ニーチェとは反キリスト教・反マルクス主義的な立場をとる生の哲学者として19世紀後半最大の思想家であり、20世紀の実存哲学の祖といわれている人物であり、とくに反キリスト教、アンチ・クリストといわれる思想性に特徴をもっているといわれ、ニーチェの思想の根源語として「神の死」「超人」「永劫回帰」「運命愛」「ニヒリズム」などをめぐってさまざまに語られているが、共通する規定は19世紀における西欧キリスト教文明への強烈な批判がその思想の根底を貫いているといつてよいであろう。そのなかで対称的な評価をするニーチェ論をみると、正統派マルクス主義に近い水田洋氏は「ヨーロッパ文明の危機、キリスト教道徳の

解体を認識し……キリスト教、資本主義、社会主義、民主主義を、弱者の世界とし、『世論とは個人の怠惰のことであり』とし、超人によってあたらしい価値を樹立……近代社会の危機をのりこえて、あたらしい社会と文化をつくりだすとかんがえた。この点でニーチェの『超人』とマルクスの『プロレタリアート』を対比することは、きわめて重要である。プロレタリアートは、資本主義のなかで量的にも質的にも成長し、これをのりこえるのであるが、超人は、資本主義とは無関係に、そとがわからずにそれを否定する、少数の貴族の人間である。マルクスにとって、資本主義社会の克服は、歴史の必然的な展開であり、大衆の自由と平等の実現であったが、ニーチェにとって、それは力による歴史の切断であり、えらばれた少数者の支配の実現であった。……資本主義社会の危機における少数者の暴力的支配がファシズムであるが、ニーチェがドイツ＝ファシズム(ナチズム)の思想的源想となり、かれのえいきょうをうけたソレルがイタリア＝ファシズムの思想的源流となったのは、そのいみでとうぜんといわなければならない。」という解釈をされているのに対し、19世紀風大思想体系を崩壊させたと評価されている清水幾太郎氏は「暮れて行く19世紀に向ってニーチェが『深い嫌悪』を感じる時、ヨーロッパは2千年に亘ってキリスト教徒であったことの償いをせねばならぬ時期(「力への意志」)を迎える。19世紀を通じてキリスト教の没落は決定的になった。『我々は、我々を生きさせてきた重力を失う。当分の間、我々は、どこから来り、どこへ行くか知らぬであろう。』キリスト教は人間に対する重圧であったが、しかし、この重圧の下でのみ人間は自己の内外に意味を見出すことができたのであった。『パスカルは言った。「キリスト教の信仰

がなかったら、自然や歴史と同じように、君たち自分が化物になり、混沌になるであろう。」我々は、この予言を成就した。』……キリスト教が没落して、人間は重力のない世界に滑り込む。『神は死んだ』というのは、ニーチェが20世紀に遺した多くの言葉の中で最も有名なものである。／しかし、19世紀とともに死んだのは『神』だけでなく、『神々』もまた死んだのであった。19世紀に生まれた『社会主義的および実証主義的諸体系』のうちに多くのキリスト教的なものが残っているとニーチェはいう。残っているところではない。神が死んでいく時代の束の間とはいえ、(マルクス主義のような)…諸体系が神々として現われ、かつてキリスト教が果たして来た役割を承継したのであった。しかし、神の支配に比べて、神々の支配は非常に短命に終り、神々は戦い合いながら19世紀末に亡びる。ニーチェがニヒリズムを説いたのは、神と神々が死んで、意味と連関とを失った諸事物が自由に浮動し始めたという事態のためであり、人間自身が、新しく神になって、この混沌を構成せねばならぬという運命のためである。」といわれ、清水幾太郎氏はニーチェの超人思想がナチズムを生んだという説はニヒリズム到来の予言は20世紀の世界大戦・大恐慌・革命・ナチズムなどの大混乱の出現を的中させたとされ、別の書(『思想の歴史10』で、「ナチは無思想ということに相場がきまっている。……この無思想を表現する名称として、以前からニヒリズムという表現が用いられている。ヘルマン・ラウシュニングの『ニヒリズム革命』(1939年)からはじまっているのかもしれない。また、その後、スイスのデュレンマットの『政治の崩壊と再建』(1951年)が、ナチのニヒリズムについて詳しく述べている。……私自身も、ニヒリズムの大きな流れの中でナチを見ようと

考えている。」といわれているが、いまになってみると両理論家のいずれがニーチェとマルクスへの解釈が正確だったのかはいうまでもなくなっている。

ニーチェのキリスト教批判の論理

20世紀の後半、つまり第2次世界大戦後の日本の社会思想界を完全に制圧し、全社会科学をその論理で、統一的に整理・体系化して理論的・倫理的に支配し、現実社会でもいくつかの巨大な騒動を起して、まったく新しい社会を出現させるかと眩惑させたマルクス主義が、壮大なゼロとして消滅してしまった契機を論究する日本の理論家たちが、40年以上も前に、マルクスに対抗する理論家の一人にニーチェが指名され、彼のニヒリズムという理論が20世紀の現実を捉えていたことが指摘され、その理論の根底には19世紀西欧社会における理性中心主義とキリスト教道徳への強烈な批判が貫かれていたことなどの規定をみてきたのであるが、これだけでは日本の理論家によるニーチェ論を覗いているだけになるので、ニーチェの理論の一つの大きな柱であるキリスト教道徳を批判する論理をみていくことにしたい。

さまざまな顔をもち、その正体は捉えにくいといわれるニーチェの全体像についてはのち無理にも解釈するが、まずその特徴があるキリスト教批判の道徳論からみるとすれば、『善悪の彼岸』、『道徳の系譜学』、『力への意志』の三冊に論究されているのであるが、明らかにキリスト教道徳を批判しているのは『道徳の系譜学』なので、そこで説かれているキリスト教にかかわる論理をかみくだいてみていくことにする。系譜として歴史をみていくと、人類は各人それぞれ自己の生の充実や利益の確保のために社会

的集団をつくって共同利益を確保し、社会契約を結んで相互に扶助しあって生活保障と向上の恩恵に浴してきたが、人間集団は必ず強者・支配者と弱者・敗北者の分断を生み、(ニーチェはここに「貴族道徳」と「奴隷道徳」という対照的な生き方・感じ方の基準が形成され、両者の間に現実的にも思想・宗教的にも葛藤がくりかえされ、善と悪、優良と劣悪、高貴と下劣、利己主義と利他主義等々が相互に意味や価値が入れ替わることが考察されるのであるが、ここでは奴隷の道徳であるユダヤ教・キリスト教がギリシャ・ローマの貴族の道徳に優位していく論理だけみていくことにする) どうしても社会的な競争や闘争にならざるを得なくなるので、ごく一部の強い勝利者・成功者を除いてほとんどの人びとは生きていくうえで苦痛・苦悩や不遇を感じさせられる敗北の状態の方に陥り、生の充実・陶酔を得られるどころか何らかの形で社会的な敗北を受けたような負い目、苦痛・苦悩をもたされるのが通常であることになっているため、現象的に勝利者となっているようにみえる強者・権力者との社会的競争や闘争に敗れてその支配下に組み込まれて、自らの生を充実させようとする意志をくじかれ、自らの思い通りの生き方ができない敗北者・被支配者あるいは弱者・貧困者といった存在になっていると感じるので、弱者は当然に強者や成功者・勝利者へのルサンティマン(恨み・妬み・敵意)をもつことになってしまい、現実を支配する強者・富裕者に対して復讐しようとする強い意志を当然もつはずなのであるにもかかわらず、実際には支配される弱者・貧困者・敗北者はその支配者である勝利者・権力者・強者に圧倒的な力で抑えつけられてあらゆる面で敵わないだけでなく、この世界・社会において現実的に直接復讐して弱者・敗北者がルサンティマンを解消する

ことはまったく不可能な体制・社会構造にとじこめられているので、現実での復讐は断念せざるを得ないから観念の世界に属する倫理・道徳および宗教の領域においては強者・勝利者・権力者はそれだけで悪・不正の存在であるという決めつけをし、逆に強者に敗北して支配されている弱者・貧困者・被支配者はみじめであればあるほど、その状態に生きているだけで無条件に善であり正義でさえあり、いま恵まれなくても来世では神に救済されてルサンティマンもはらされると啓示しているのがキリスト教の教義なのだという驚異的な裏目読みをしている思想家だったのである。

(この考察にみられるように、ユダヤ民族はもともとエジプトの奴隷集団であり、モーセに率いられて出エジプトを果たし約束の地に国を立てるのであるが、独立して繁栄したのはソロモン王前後の一時期だけで、あとはすべて周辺の大強国に支配・蹂躪されっぱなしだったので(とくにバビロンの捕囚の時代などは悲惨きわまりなかった)、想像の世界で絶対的創造主が現実の価値観をすべてひっくりかえして、強大国につらなる支配者、富裕者などの強者はすべて悪・不正として憎み、支配されている貧者・弱者などは小さい者として愛されるという一神教を創ったといわれている。どういわれようと、この一神教こそが現在の全世界を支配・主導している西欧文明を創っていることは確かである。)

キリスト教とルサンティマンのかかわりについてのニーチェの理解

このように、いま世界最大の宗教であるキリスト教が成立・発展していく経過には、この世界・社会においてさまざまな事情で競争・闘争

に敗北して底辺に生きる弱小貧者が、社会的勝利をした支配者・強大富者に対してもつ怨念・ルサンティマンを、この世では復讐してはらすことができないので、屈折させて宗教の世界で強大富者はそれだけで悪・不正な存在、弱小貧者はそれだけで善・正義の存在という教義をつくって、ルサンティマンを宗教的観念の世界で復讐しているという奇想天外の説を提起したニーチェの論理を大分くだいて敷衍してみたのであるが、ニーチェ自身はどんな文章を書いているのか少々引用してみよう。

ニーチェ自身も「キリスト教というものが怨恨（ルサンティマン）の精神から生まれた。」といい『道徳の系譜学』において「道徳における奴隷の叛乱はまず、怨恨の念（ルサンティマン）そのものが創造する力をもつようになり、価値を生み出すことから始まる。このルサンティマンは、あるものに本当の意味で反応することができないために、想像だけの復讐によって、その埋め合わせをするような人のルサンティマンである。すべての高貴な道徳は、勝ち誇るような肯定の言葉、然り（ヤー）で自己を肯定することから生まれるものである。ところが奴隷の道徳は最初から『外にあるもの』を、『他なるもの』を、『自己ならざるもの』を、否定の言葉、否（ナイン）で否定する。この否定の言葉、否が彼らの創造的な行為なのだ。」と、奴隷の道徳の高貴な道徳との相違と役割を述べ、「ユダヤ人とは、貴族的な価値の方程式を（すなわち良い＝高貴な＝力強い＝美しい＝幸福な＝神に愛された）、凄まじいまでの一貫性をもって転倒させようと試みた民族であり、底しれぬ憎悪の（無力な者の憎悪の）〈齒〉を立てて、その試みに固執した民族なのである。すなわちユダヤ人にとっては『惨めな者たちだけが善き者である。貧しき者、無力な者、卑し

き者だけが善き者である。苦悩する者、とぼしき者、病める者、醜き者だけが敬虔なる者であり、神を信じる者である。浄福は彼らだけに与えられる——それとは反対に汝らよ、汝ら高貴な者、力をふるう者よ、汝らは永遠に悪しき者であり、残忍なものであり、欲望に駆られる者であり、飽きることを知らぬ者であり、神に背く者である。汝らは永久に救われぬ者、呪われた者、墮ちた者であろう！』というわけだ。」とユダヤ教の確立までの倫理的価値の転換の葛藤を語っている。そしてニーチェはつづける。「このユダヤ人の価値転換の遺産をうけついでのが誰なのかは、よく知られていることだ……復讐と憎悪、ユダヤ人的な憎悪の〈原木〉——もっとも深く、もっとも崇高な憎悪、理想を作りだし、価値を転換する憎悪、地上に比べもののないような憎悪——から同じく比べようのない〔優れた〕ものが生まれてきたのだ。それは一つの新しい愛であり、すべての種類の愛のうちでもっとも深く、もっとも崇高な愛である。……あのナザレのイエスは愛の福音を体現する者として、貧しき者、病める者、罪を犯した者に、至福と勝利をもたらす『救済者』として現れたが——イエスこそまさしく、もっとも不気味で、もっとも抵抗し難く誘惑する者ではなかったか、ユダヤ的な価値と理想の革新へと誘惑し、迂回路を導く者ではなかったか？ ……イスラエルはまさにこの『救済者』という迂回路をたどって、その高貴な復讐欲の究極の目標を実現したのではなかったか？」とニーチェのいう言説をたどっていくならば、さきほどの拙い考察で示した弱小貧者はそうした存在のしかただけで善・正義であり、逆に強大富者や支配者はそのあり方だけで悪であり、不正義だというキリスト教の教義はイエスが完成させたのだといっていたのである。

このようなニーチェの論理的視点からするならば、旧約聖書・ユダヤ教には「神はつねに貧しき人びととともにある（インマヌエル）」という基本的教えが貫かれているといわれているのははじめとして、新約聖書においてはイエスが伝道者として登場する第一声が「悔い改めよ、神の国は近づいた」と唱えつつ、「貧しい人は幸いである、神の国はあなた方のものだから。悲しんでいる人は幸いである、慰められるから。飢えている人は幸いである、満ち足りるようになるから。」と貧困者を称揚した後、「富んでいる人は禍である、慰めを受けてしまっているから。満腹している人は禍である、飢えるようになるから。笑っている人は禍である、悲しみ泣くようになるから。」と富裕者を威嚇するような説教をして、神の目からは富裕者という存在は禍いであると断定し、イエスの伝道は貧困者のための教えであるとしているのであるが、この富裕者を否定的に評価して貧困者を称揚するという通念や常識を逆転させる教義こそ貧困者のルサンティマンを観念のなかで解消させ、弱い・小さい・貧しい者の自己満足を誘って、現実での支配体制に反抗させないように作用している奴隷の道德なのだということである。

（ただし、ニーチェが「キリスト教はルサンティマンの精神から生まれた」といっているのに対し三島憲一氏は、厳しく条件付けられて、弱小貧民のユダヤ民族が、エリスという嫉妬の女神に導かれて、道德の基準である善と悪との意味をすりかえて、「すりかえによって価値を捏造し、神の国やイデアの世界を説明することによって強者を引きずりおろすこの働きをニーチェは〈ルサンティマン〉と呼んでいる。逆恨み、怨恨とでも訳し……自分より強い人間、優秀な人間への反感を正義、神、学問、精神、平等の名によって正当化し、心の奥の湿ったう

す暗い部屋での密やかな〈復讐〉の快楽に酔う——これこそプラトンとキリストの弟子たちの心理である」というような単純なものではなく、「ルサンティマン自身が創造的になって、価値を生み出すことによって、道德における奴隷の反乱がはじまる。」といわれるように、キリスト教はルサンティマンを昇華しなければ成立していかないはずのものでもある。）

イエスの活動と弱者のルサンティマンは壮大な千年王国（共産主義）を生んだ

ただ、イエスの活動を弱者のルサンティマンが生んだ願望と捉えた方が単純に理解できる面がある。旧・新約聖書を貫く宗教的道德はニーチェのいうように弱小貧者のルサンティマンを逆転・昇華させた教義・啓示によって成立しているとする裏目読みが、実際にできるものか、恣意的になるが新約聖書から例をあげてみていくとすると、イエスは「丈夫な人には医者是要らない。要るのは病人である。私が来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」とあって、イエス自らが小さい弱い貧しい地の民のなかへ実際にでかけて行って、彼らの心身の苦悩・苦痛を自らの手をかけて救済・治癒する奇跡まで含むじつに数多くの活動さしているなど、イエスとキリスト教が敗北者としての弱小者の救済をするという主要な教義的目標を根底にもっていることがみえてくるのであるが、こうしたキリスト教独特の弱小貧者の優先的選択という宗教活動は、ニーチェのいうように敗北者・弱者の勝利者・強者へのルサンティマン・怨念を教義のうえだけで観念的に解消する作用も包含されていたという面もみえてくることも確かである。

とくに新約聖書において非常に重要な意味を

もつ神の国への入国の可否をめぐり勝利者に対する敗北者の怨念の復讐という事情がさまざまに語られていく。もっとも端的な論理は「金持ちが神の国に入るのは難しい、金持ちが神の国に入るよりもラクダが針の穴を通る方がまだやさしい」と弟子に教えているように、貧者・弱者が優先されるキリスト教にとっては、現実の社会の政治・経済の領域における勝利者である支配者・金持ちは被支配者である貧困者の敵あるいは仇であるから、そのあり方だけでも恨みや憎しみの対象なので入国の決定権をもつイエスも弱小貧者に加担して、金持ちを無条件で批判・非難して倫理的に貶めたいと、決定的には来世においては神の国に入国できないことを示し、ニーチェが指摘するような弱小貧者〈これに愚かで卑しい者がつけ加わったりする〉のルサンティマンを観念のなかで解消させていたのである。

先にもみたように、新約聖書ではイエスは「悔い改めよ、神の国は近づいた」と唱えて宣教を開始しているのであるが、神の国とは新約聖書ではもっとも重要な教義的概念あるいは理念的な存在で、人が生きる目的は神の国への入国を許されそこで永遠の命を与えてもらうためであるといえるほどのものなので、「すべての民族を裁いて」神の国に入国の許認可権をもつイエスは、人が神の国に入るために何をすべきかをじつと多く語っているのをみることができ、そこでは強者・金持ちの入国は極めて困難であるとくりかえされ、とくに弱者・貧者に冷たい仕打ちをした者は永遠の命を得ることは拒否されるどころか、来世では永遠の業火に焼かれるという現世からの復讐を受け、逆に貧者・弱小者など彼ら自身と、その貧者・弱小者に温かい援助や処遇をした者、つまり「富を神の国に積んだ者」は神の国で永遠の命を与えられるという

倫理的・道徳的な教えがしばしば論されているのであるが、さらにこのような倫理はたとえ話（譬え話）としても語られ、現世で栄耀栄華、贅沢をきわめていたある富裕者は傲慢で信仰を欠いて生活を続けていたのち、死んで来世にいくと業火に焼かれる場に落とされて塗炭の苦しみを受けるように変わってしまったのに対し、その金持ちの食事のおこぼれにもありつけないで飢餓や病に苦しめぬいた貧困者の方は来世では神の傍らで永遠の命を受けて幸福に生きられるようになっていくという、まさに弱小貧者のルサンティマンをはらすことのできるような出来事が、人が現世から来世への移行に際して神の国を介在させてその境遇が逆転されるという神の国の論理が示されている。

こうした弱小貧者が完全に強大富裕者に勝利し弱者のルサンティマンが全面的に解消される啓示・たとえ話は牧挙にいとまがないが、神の日あるいは最後の審判といわれ、世界の終末時にすべての人びとを裁いて神の国への入国ができるかどうかを決定する際のイエスの活躍にあり、「すべての民族を裁く」ともいわれるその場面では、この世に生を受けた者すべてが呼び出されている前で、「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答

える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』／それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いていたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気があったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』／そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのはわたしにしてくれたことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。(マタイによる福音書 25章31節～46節)と弱小貧者を援助・救済したか否かによっていると語り、人が救済・援助をしたり、また他の人は無視して救済しなかった弱小貧者はイエス自身＝神だったという驚異的論理を語り、弱小貧者は強大富裕者より神に近いということを知らされるという思想構造になっているのであった。

(この神の日に自らの生活をあわせて、「悔い改め」たり、「富を神の国に積ん」だりするな

らば、イエスの教えは単にルサンティマンをはずすだけでなく、生活を律して神に従うという道徳的昇華につながるということになるのかもしれない。)

弱小貧者は善・正義、強大富裕者は悪・不正とする宗教

このように、キリスト教の倫理では弱小貧困者は苦闘・苦悩をしているといっても、謙虚に勤勉・禁欲をしていれば現世でも神に愛され救済されているのであり、その苦しみの報いで無条件で神の国に入国できるのに対し、現世で信仰と反省なき傲慢な富裕者は神に憎まれ来世では懲罰を受け神の国への入国ができないだけでなく永遠の業火に焼かれるのに対し、くどくくりかえすならば無垢な貧困者は信仰深く謙虚であればそのあり方だけで現世でも神に愛されて心身の救済を受け、来世は神の国に入国できて永遠の命を授かるとしているキリスト教の教義は、はじめから弱小貧者優先の宗教であるといわれているとおりであるが、ニーチェのように裏目読みをするとキリスト教は観念の世界で神の国の理論をつくって、現世での貧富、強弱、善悪あるいは勝敗、正不正等の基準を神の国において逆転させることによって、現実の世界での敗北者・弱小貧者のルサンティマンを神の国・倫理の世界でその地位を逆転させて復讐したつもりにさせて、からくりで敵意や恨みを発散・解消できたと錯覚させて、現実の世界で実際に復讐や反抗をしないようにさせる宗教だということもでき、キリスト教こそ貧困者・弱者の救済を第一におく宗教であるという社会政策・社会福祉の存立根拠としてもっとも優れて尊重されている教義的特性をニーチェは逆転させて読み、これこそ弱者・貧困者・敗北者が強者・支

配者・勝利者に対してもつルサンティマンを観念のなかで復讐したと錯覚させる自己満足の倫理なのだとしているのである。

〔西洋哲学は自然主義と反自然主義の果てしない戦い〕のくりかえしという捉え方をしている門脇俊介氏は、ニーチェのキリスト教解釈には反自然という立場をとっているとされ、「キリスト教の母胎となり、キリスト教をいまだ本質的に制約しているユダヤ教は、自然からその自然らしさを剥奪してしまった宗教だという。ヤハウェの神は本来は、自らの隆盛と幸運を自己肯定するイスラエル民族の生の表現であって、ここにはまだ、生とその道徳や神との『自然的な』関係が保たれていた。ところがユダヤ教のうちで、自らの幸福のゆえに神に感謝し、自らの不幸ゆえに神を捨てるという自然的な関係が逆転されてしまう。あらゆる幸福は神から一方的にもたらされる報いであり、あらゆる不幸は、神に対する不服従という罪に対する罰だと解釈される。神との自然的なつながりにおいては、神を捨てる『原因』となるはずの不幸が、神への不服従という罪への『結果』となってしまうような、因果関係の逆転が起こるのである。」と、ニーチェが捉えているキリスト教の反自然的・逆説的な教義の論理構造をじつに的確に解明をされつつ、直接ニーチェから「報いと罰という考え方を使って、自然的因果性が世界から除去されてしまうと、一つの反自然的因果性が必要とされた。いまやそこから、その他すべての自然ならざるものがそれに続く。……道徳は、抽象的になり、生の対立物になってしまう」と教義が自然から反自然に転換するというキリスト教の反自然的・逆説教義の成立を示唆する文を引用され、「生の本質としての自然に対立して捏造されるのは、反自然的因果性によって貫かれた『道徳的世界秩序』であっ

て、この秩序のうちでは『神の意志』が、それへの服従の程度に応じて人を罰した報いるものとして支配する。〔『現代哲学の戦略』〕といわれているのは、上述してきたキリスト教の弱者のルサンティマンの観念的解消行為の根底には、キリスト教が旧約聖書の時代に果たした反自然的因果性への移行という教義の論理的構造の転換があったからこそニーチェの逆説が成り立つような基盤ができていたということを示す優れた考察として紹介しておきたい。)

マルクス主義はキリスト教と関係があるのか

いま、半世紀近くも前に日本のマルクス主義勢力や左翼諸集団が、いわゆる60年安保闘争という騒動あるいは暴動を起したにもかかわらず、そのような体制的危機を日本の革新勢力や革命政党がプロレタリア革命へと展開できなかった反省から、マルクス主義を徹底的に批判する清水幾太郎氏やマルクス主義を再生させようとする梅本克己氏の著作において、19世紀の西欧の思想家のなかでニーチェのニヒリズムの到来という予言は的中し、マルクスの共産主義到来という予測は外れてしまったという指摘の紹介からはじめているため、つい予言を的中したアンチ・クリストのニーチェの理論の解明にキリスト教の教義を絡めてしまったので、それに足をとられてしまっているのであるが、そうとすれば19世紀のアンチ・クリストという点では同じマルクスの方の論理もキリスト教とどう関係しているのかをみておかなければならぬであろうから、恐慌の問題からもう少し寄り道をして両者の予言が的中しているか否の中なのかに分かれた原因が、キリスト教に対しどういう地歩から論理を展開したかどうにかにかかっていることについても対比してみておきた

い。

旧約・新約聖書の随所にみられる政治的・経済的・社会的支配者への敵意、そして被支配者・弱者への同情の直截的表象のうちの代表は、天使ガブリエルから聖霊による受胎告知を受けたマリアが神への感謝をこめて「主はその腕で力を振るい／思い上がる者を打ち散らし／権力あるものをその座から引き降ろし／身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良い物で満たし／富める者を空腹のまま追い返されます。……」と述べたという『マリアの賛歌』にもよく表れているので、この個所を両者の理論に即して考察してみると、新約聖書のなかで聖母マリアに権力者や富裕者を非難させ、悪罵を投げつけているのを読んで弱小貧者は頭のなかでルサンティマンをはらしたと留飲をさげたり、また神が「身分の低い者を高く上げ／飢えた者を良い物で満たし」てくれるだろうという虫のいい期待をもたせるようにしむけているなどは、観念の世界のなかでのみ強弱・貧富あるいは善悪・正邪などを逆転させている安易さは、奴隷の道徳だとニーチェは奇想天外な解釈をするであろうことはみてきたとおりである。

ところで同じ『マリアの賛歌』の「主はその腕で力を振るい……権力あるものをその座から引き降ろし／身分の低い者を高く上げ……」という内容は、受胎告知のあとなので神は貧しい者・弱い者を救うためにイエスをこの世につかわされるという予告をしているのであり、神は貧しい者とともにあるというもっともキリスト教的な教義につながっていく重要な発言なのだということができるはずなのに、ニーチェにいわせれば、いまみたようにこのような言葉のうえだけで神は強者と弱者を逆転させると宣言しているのは、強者・勝利者・権力者に対する弱者・敗北者・貧困者のルサンティマンをキリス

ト教という教義の世界のなかで弱者本位の勝手な倫理をつくってそれに合わせて強者を観念のなかで蹴落として復讐したつもりになって、ルサンティマンの感情を表面的に解消しているだけで、現実は何も変わらないのだということになるうが、『資本論』という資本主義と資本家階級の虚偽性を暴く経済学理論を書いたマルクスならば、「マリアの賛歌」に社会主義の原型をみ、彼はその賛歌を数万歩進めて1848年に『共産党宣言』なる革命論を書くのであり、とくに「主はその腕で力を振るい……権力あるものをその座から引き降ろし／身分の低い者を高く上げ……」といっている言葉は、抽象的で具体的な規範的な論理には不足があるものの、「権力あるもの」を資本主義体制の支配者・強者である資本家階級を、まさに弱者・貧者として不利な状況におかれている労働者階級が（歴史的必然性という神のご加護を受けて）この現実を革命して神に愛されている弱者が主体となる共産主義社会を創れとマリアは提唱しているのだという深読みをしているに相違ない。おそらく2000年にわたって西欧キリスト教社会で読みつがれ、教えられてきた神による革命論は誰もが知っていたであろう。

ところがニーチェの解釈ではこの賛歌のようにキリスト教の弱小貧者救済の教義とは、この社会の敗者のルサンティマンの歪曲的解消をしている欺瞞的・自己満足的な宗教だと否定的な指摘するだけなのであるうが、マルクスは同じ教義についてルサンティマンのような怨念・敵意をもつ弱い・小さい・貧しい者（：労働者階級）は、強い・権力をもつ支配者への恨みをはらす行為を神の力に頼って幻想的に成功させるのではなく、現実の場で強くて富んでこの社会を支配する勝者（：資本家階級）を『マリアの賛歌』のとおりその座から引き降ろす行為

を、実際に弱い者が強い者に対してもつ恨み・憎しみを共通・共同の敵意の核として結束・団結し、弱小貧者全体が自らの手で強い者を打倒しなければならないという理論を創って現実に転化させよと主張していたことは、プロレタリア革命の指令書である『共産党宣言』が「万国の労働者よ、団結せよ！」というスローガ的な結語に仕立てあげていることにもみることができ、マルクスこそキリスト教が社会を弱小貧者と強大富者とに分別・分類して、神は弱者の側に立つとする思想・思考方法を正統に継承して、神に愛されながらも社会的に虐げられ支配される弱い労働者階級は団結して、神に憎まれている強い支配者である資本家階級を神の啓示に従って打倒すべきだといっているのだということが許されよう。

キリスト教の継承者マルクスと反逆者ニーチェ

つまり、キリスト教はこの世に生きる人間を貧富、強弱、善悪などの二階層に分類をし、神はつねに弱い・小さい者の側に立ってその救済を全面的に実施するとともに、強い者・富める者をたたき落とすようになることを説いているのであるが、この図式をニーチェは観念の世界のみで貧者が救済されるだけの欺瞞的な奴隷の教義だとして批判だけしているのに対し、弱者優先の神の意志をもっとも忠実に継承して現世で実際に強者を倒し弱者救済の社会変革闘争を起こすべきだと主張しているのはマルクスであり、その理論こそ強者・支配者を実際に打倒するための革命を神頼みではなく、キリスト教の教義を全面的に進め弱者自身が強者へのルサンティマンを復讐の心のバネ・弾機にして結束・団結して蜂起し、実際に強者を政治・社会・経済の現実的支配から追放・打倒して、弱者が現

世でも自由で平等に生きられるようにしなければならないという規範的理論を提起しているのである。

ではマルクス主義哲学者の梅本克己氏が、弱小貧者救済という点ではキリスト教の正統な継承者とみなしてもよいようなマルクスが、資本主義体制の弱者である労働者階級が、支配者で強者の側にある資本家階級を打倒するプロレタリア革命により資本主義体制を崩壊させると、『マリアの賛歌』を再現したような19世紀の主張が20世紀に実現せず、現実的有効性を失って無意味となったのに対し、逆にキリスト教を弱小貧者のひがみ根性が来世に救いを求めて創られた眩惑的な奴隷の道德だと、悪意に満ちたような否定的な規定をするアンチ・クリストのニーチェがニヒリズムが到来するといったという予言の方は、世界・社会が大混乱するようになる20世紀には現実化しているというまったく質の異なる事象と理論の対比的評価を、なぜされていたのであろうか。(ちなみに、マルクスの革命論は、「マリアの賛歌」をはじめとして聖書の各所にみられる神の手によって強者・富者が否定され、弱者・貧者が救済されて両者の状況を逆転させる貧者への恵みあるいは恩寵という革命の記述などに比べると、はるかに緻密で詳細である。もちろん、弱小貧者を最優先選択するキリスト教だから、聖書ではその救済をしなければならない貧者・地の民はさまざまに語られる。イエスが実際にみずから救済する活動を現場としてとらえかえしている滝沢武人氏が「貧しい者、弱い者、罪ある者など、当時の最底辺者たちと共に生きたイエスの日常は、貧困と飢餓、病気と障害、差別と抑圧にまみれていた。そうした『現場』に徹底してこだわったイエスの真実の『生』を、福音書を読み直すことによって明らかにする。」とされて、『イエ

スの現場』を著わされているのであるが、その各章の題名を追っていくとイエスの救済しようとしている最下層の人とは何かが見えてくるので、各章の名称だけを紹介させていただくと、「2. 乞食、3. 貧困・飢餓・穢れ、4. 病気・障害・悪霊、5. 罪人・悪人・盗賊・土民、6. 徴税人・娼婦・羊飼・日雇い・奴隷、7. 異邦人・サマリア人・ガリラヤ人・ナザレ人、8. 離縁・姦通・長血・寡婦・子供・家族……」となっており、イエスがともに生きて救済しようとし、救済した人びとの類型が明瞭となっている。イエスはこれらの人びとの一部を現世で直接救済するのであるが、ほぼすべての最底辺の人びとをのち神の国へ送り込むことで救済するとともに富裕者・支配者・強者を神の国に入国させず永遠の業火に焼かれる場につき落とすことにより、現世での貧富や強弱・幸不幸などを完全に逆転させるキリスト教的革命の実現へと導かれることになる。ただ、正確にいうならば上述のような滝沢武人氏の選んだ最底辺の人びとの救済は革命でなく、いわゆる社会福祉といわれる施策領域の役割に任せるべきであるが、キリスト教では最底辺の人びとの救済と最上層の最強の支配者を地獄へつき落とす逆襲とがセットになっているので、やはり社会福祉でなく、革命だといった方がよいのかもしれない。しかもキリスト教の救済論はこのように単純なものでなく一つ代表的な例をあげると新約聖書の最後に置かれている「ヨハネの黙示録」にみられるように隠喩をつらねながら、ユダヤ民族とキリスト教徒をきわめて厳しく弾圧し搾取して繁栄をきわめている傲慢な超大国ローマを神の使いが民をも含めてしまうものの徹底的に破壊して滅亡させるという終末を迎えさせるのであるが、終末と同時に神が再臨して最後の審判をし、圧政に苦しんだ弱い、小さい、貧しい人びとは千年王国・

神の国に迎えられるという、終末と神の国の出現が同時に起きるという構成になっているので、こちらの方がキリスト教的革命論にふさわしいといえよう。マルクスは超強大国ローマを資本家階級とみ、弱小貧国ユダヤを労働者階級に擬して、さんざん苦しめられた弱者が自ら団結して強者を打倒し、千年王国・共産主義を現出させようという革命論をつくっていくことになる。なぜこの社会に強者と弱者ができ、それがなぜ対立するかというマルクスの論理は革命論としては他を圧している。マルクスは自身が資本主義と名付けた特定の体制のなかで、資本の原始的蓄積(本源の蓄積)に成功した人物が、その不変部分で新しい産業形態としての生産手段をつくり、蓄積競争に敗れて売れるものは労働力だけになってしまっている人びとを可変資本として生産過程にしばりつけ、労働力の商品化という人間疎外化させて抑圧・支配するようになるとし、マルクスは資本主義という支配構造がよくみえない体制が資本と生産手段の所有関係において資本家階級と労働者階級が対立・闘争的に併存しているが、前者は後者を経済的に搾取、政治的に支配、社会的に抑圧する体制であることを、現実の社会構造自体に政治経済学を創って論理的切り込みをして、その根源的矛盾の本質を解明し、資本・生産手段の私的所有という不正義・悪に虐げられて窮乏化させられている弱者である労働者階級はやがて覚醒し、蜂起して資本家階級を打倒すると考え、「すべての国のプロレタリアートよ、団結せよ！」と訴えていたのであったが、資本家と労働者という強者と弱者のあり方・名称は異っているものの、虐げられ苦しめられた正なる弱者が不正の権化である強者に打ち勝って、神の国・共産主義社会へ優先的に導かれるというキリスト教の革命論の骨子は踏襲されているのを見ること

ができるのである。)

そこで再びマルクスからニーチェの方に目を移してみると、ニーチェのアンチ・クリストぶりはキリスト教を弱小貧者のうらみ・ねたみ・敵意などの悪意を裏返し、観念のなかだけで弱者を優位とする手前勝手な解釈をして創った奴隷の道徳と批判するだけでなく、その宗教・道徳の中心に絶対者・超越者として最上位に位置する「神は死んだ〈Gott ist tot〉」と宣言し(非キリスト教徒にとっても、恐怖を感じさせるようなこんな驚異的な言葉をなぜ提起したのかについては、後に推論するが)、そのため「最高の諸価値が無価値になるという」ニヒリズムが到来すると予言をし、キリスト教によって裏付けられたあらゆる価値が無意味になり、「目標が欠けている、“なんのために”という問いへの答えが欠ける」という状況が出現すると主張し、それが20世紀になってすべての体制、すべての理論がその価値を失うという事態が現実化してきたので、ニーチェの予言が的中したとされ、その事情・理由の一つを梅本克己氏はニーチェの『権力への意志』の冒頭の、「私が物語るのは、今後の2世紀の歴史である。私が記述するのは、やがて来るもの、つまり、もはや別の形では来ることのできないものを、すなわち、ニヒリズムの到来である。この歴史は、現在もうすでに物語るることができる。というのは、その必然性そのものが、目下もう働いているからである。この将来は、すでに100の徴候のうちにあらわれており、この運命はいたるところに名のりをあげている。将来のこの音楽に対しては、あらゆる耳がすでに耳をそばだてている。われわれの全ヨーロッパ文化は、久しい以前からもう、10年また10年と過ぎるにつれて増大する緊張の拷問をもって、一つの破局に向かうかのようにして、動いてきた。不安げに、荒々

しく、また性急に、それはあたかも、終末に向かおうとして、もはや自分を省みることなく、いや自分を省みること怖れている大河に似ている。……」という文章に求められていた。

この文章にもみられるようにニーチェは、神の死によって人間が生きる目標を失ってしまうというこれから先の2世紀にわたるニヒリズムの到来の予言をしていたと示唆されているのであるが、この隠喩に満ちた引用文のうちとくに「10年また10年と過ぎるにつれて増大する緊張の拷問」と表現されているところだけは、誰にもわかる19世紀のヨーロッパにはじまってほぼ10年周期で襲来した恐慌現象のことに相違なく、ニーチェは意外にも神の死そのものと、神の死によって出現するニヒリズムの到来という観念・思想の世界の非具象的・論理的事象と、実際に周期的に襲来しては現実の社会・経済を破綻・混乱させる恐慌と、そのもたらす被害的負の結果を神の死とニヒリズムの到来を重ね合わせて把握していることみえていたのであった。つまり、ニーチェは恐慌を社会への「緊張の拷問」として神に死をもたらし、ニヒリズムを到来させる負の原動力の役割を担っていると考えていたに相違ないのである。

そこで、隠喩にみちて難解をきわめるニーチェの19世紀の社会的現実には言及している論理あるいは思想を、恐慌という現実の現象と関係させることで、その意味する内容を解明していくことにする。

19世紀西欧キリスト教社会・文化を否定するマルクスとニーチェ

ところで、マルクスやニーチェがともに生きて理論を創り、両者とも否定的に評価していた19世紀後半の西ヨーロッパ諸国は、じつ

は18世紀の後半から世界に先駆けて産業革命を達成し、それを基軸に資本主義化を成功させて急成長を果たした経済がすべての基盤となって、なにより諸国民の生活水準が向上したのをはじめ、芸術・文化・科学が隆盛になって大きな成果をあげ、またナポレオン戦争以降ヨーロッパ内部はパクス・ブリタニカと呼ばれる平和がつづき、その下で社会のいずれの分野でも史上もっとも躍動しながら、しかも安定的に繁栄していた時期にあっていたので、その時代を映す代表的表現はヘーゲルの全世界を肯定的に全面的に理論掌握した壮大な哲学体系だともいわれ、西欧諸国民はこのときほど現実に満足し将来に希望をもてたことはないといわれるような時期だったというから、急速に発展する資本主義の構造的欺瞞をあばいて厳しく否定しつづけるマルクスも、全ヨーロッパのキリスト教文化が破局に向っていると批判しつづけるニーチェも、ともに異端中の異端な、だから生前には認められなかった思想家だったのであった。

多くの日本の社会思想史の理論家が、19世紀後半の西欧社会と社会思想を対象として論述するとき、大植民地帝国・世界の工場イギリスを急追するフランス・ドイツの発展を基軸とする資本主義の矛盾が拡大する危機のはじまりという叙述をされるが、いまみたように社会の危機を呼ぶのはほとんど無名のマルクスとニーチェくらいのものであったから、西欧社会は平穏だったことを、『二十世紀』の著者海野弘氏は20世紀初頭の10年は19世紀の余韻の残る安定した時期だったといわれて、シュテファン・ツヴァイクの回想を引用されている。「私が育った第1次世界大戦以前の時代を言い表わすべき手ごろな公式を見つけようとするならば、もし私がそれを安定の黄金時代であったと言えば、おそらく一番適確ではあるまいか。ほとんど千

年にも及ぶわれわれのオーストリー君主国では、すべてが持続のうえに築かれているように見え、国家自体がこの持続力の最上の保証人であった。『昨日の世界』とされていたり、また清水幾太郎氏は『現代思想』でジョン・カースの「幸福な時代、美しい時代……この時代は技術と経済の勝利を獲得し、ただ静かに拡がっていく一つの未来を信じている。順調な時代、貨幣は安定し、一切の価値が安定している。みんな戦争や革命の危険は避けて通る。……この時代は一つの同質的な閉じた全体を形作っている。……幸福な民族は歴史を持たぬ。幸福な時代もまた歴史をもたない。」と、19世紀後半の西欧社会をくりかえし称賛する文を引用してその特徴を明示されているが、日本では1868年の明治維新以降のやと近代化の緒についた時代に当たる時期の、西ヨーロッパ社会の経済と文化は隆盛を極めていと内外に認められていたのであるが、この繁栄を誇る社会の内部でその社会に否定的評価を与え精神性を欠いた空虚な文明だと呪詛するニーチェや、繁栄する現実社会の根底には解決不可能な所有関係の矛盾が内蔵され、それらの拡大・激化が体制崩壊に結果するというマルクスの二人は、19世紀ではきわめて例外的な存在だったということができよう。(マルクスもニーチェも、歴史上に燦然と輝く傑出した偉大な思想家であり、20世紀の世界を動かした理論家であったにもかかわらず、二人とも生前には思想界・理論界あるいは社会にも認められず、ともに貧窮きわまりない生活をしていたので、底辺から世界をみていたところが共通していたといえるかもしれない。)

そのマルクスもニーチェも上述したように、19世紀の隆盛に発展する幸福な美しい時代の文明のなかでほとんどの人は気に掛けず、理論家にも論じられることのなかった恐慌に着目

し、二人とも恐慌を19世紀の表面的には繁栄する西ヨーロッパの社会を崩壊させ、時代を変えていく否定の原動力として捉え、当時誰もか思いつかないような時代否定の論理を構築し、それが20世紀をも予測されていたという点でも共通する営為をつづけていたのであった。

ニーチェは1882年の『悦ばしい知識』において「比較的近い時期に起こった最大の出来事——それは『神は死んだ』ということであり、キリスト教的な神の存在への信仰が信じるに値しないものとなったということであるが、この出来事——は、すでにその最初の影を、ヨーロッパの上に投げかけている。」と、「神の死」という自らの理論を自讃げに振りかざしてキリスト教批判をしながら、同時にキリスト教によって培われた西ヨーロッパ社会や文化をも否定していたのに対し、もう一方のマルクスはニーチェが生まれて間もない1848年に『共産党宣言』を発表、現実の資本主義社会はブルジョアジーが支配していてプロレタリアートを搾取して巨額の富を私的に独占していると（キリスト教の倫理を継承してその）悪行を徹底的に批判して、その支配・搾取をうけてプロレタリアートは自由を奪われて窮乏化し日常生活でも困窮する一方なので、その貧困を克服し自由を奪回するために共産主義者を中心にプロレタリアート・労働者が団結をして共産主義革命をすべきだという、旧約・新約聖書の教義を継承した論理・革命論を提起したのは前にもみたとおりである。つまり、ニーチェは19世紀のヨーロッパ社会・文明への否定的評価を神や観念の世界の抽象的問題として批判し、その徹底的否定がニヒリズムを到来させるとしたことが予言的の中につながり、マルクスは資本主義の現実そのもののなかの矛盾を剔出して、表面的には幸福で美しくみえる19世紀西欧社会

でも内部には資本家の悪が横行しているため、苦勞・苦痛・苦悩する弱小貧者が多数存在することを論究し、かれらの救済のために革命をして資本主義を崩壊させようという主張は実現しなかったという対比になるのである。

ニーチェの抽象的隠喩・マルクスの科学的法則（永劫回帰と体制発展・革命）の共通性

しかし、ニーチェの主張する論理はきわめて抽象的・観念的であり、実際には恐慌といわれているものに周期的に襲われて経済が大不況となる現実的危機を「終末に向うがごとく、10年目毎にその度を加えるこの呵責とともに、落着きなく、こり押しに、破局に向って動いている」とし、（ニーチェが恐慌を論じているとみられる文章なので、念のため別の訳を引用すると、「われわれのヨーロッパ文化は、久しい以前からもう、10年また10年と過ぎるにつれて増大する緊張の拷問をもって、一つの破局に向かうかのようにして、動いてきた。不安げに、荒々しく、また性急に。それはあたかも終末に向かおうとして、もはや自分を省みることなく、いや自分を省みることを恐れている大河に似ている。」というのであるが、ニーチェが恐慌の襲来により終末→ニヒリズムそして神の死という精神的なハルマゲドンを語る希有な文なのでもう一つの訳文をみておくと、「我々のヨーロッパの全文化は、ずっと以前から、息づまるような苦しい緊張をもって、恰も破局に向って突進するかのようになり、落着きなく、ごり押しに、驀進的に動いている。恰も一刻も早く終末に達しようと欲して……（西谷啓治）」と、精神的・肉体的に苦痛な表現がめだっている）、その結果社会的な混乱をくりかえす負の現実を、形而上学的に「神の死」というキリス

ト教にとって最大の事件である強烈な意味をもつ概念につくりかえて隠喩的な表現をし、さらに神の死により「最高の諸価値が無価値になる」のでニヒリズムなるものが到来するという論理的予見をし、死せる神に代わって超人なるものを創造して人の精神の拠りどころとして腐敗する困難・混迷の時代に敢然と立ち向かう模範をつくり、キリスト教の道德秩序が崩壊して出現するニヒリズムの時代になると、(おそらく恐慌発生のために)不条理・理不尽な苦難・困難などが人の身に降りかかるようになるが、こうした苦難・困難を運命愛として引き受け、しかも世界や人生とはこんな苦闘が永遠に何度もくりかえされる永劫回帰(周期的に循環する恐慌がモデルか?)なのであるから、人は超人に倣って「これが生だったのか、よし、もう一度」と泰然と苦難を運命愛として背負って生きることを最上の生だとする論理を創っているのである。

ただ、ニーチェの論理をこのように解釈することは誤りかもしれないような、一貫して抽象的・隠喩的な論理的な表現をする提起が多く、それぞれの概念が現実ではどんな意味をもち、実際にどのように現実と切り結びをしているのか、理解が困難な理論体系を形成をしていたのに対し、マルクスの理論的立場は実際に現実と真正面から向き合い、その現象の科学的分析を通して世界の事象の本質を弁証法的唯物論の方法〈ニーチェの世界を神秘的直観をもって捉える観念論的方法の対極にある〉をもって世界歴史の発展を経済の必然的成長と連動させて法則として捉え、自ら新しい経済学を創って資本主義社会における資本の所有関係において資本家階級は剰余価値を拡大化し、その結果労働者階級が窮乏化し、一方では恐慌を発生させ体制崩壊の原因とつくと同時にもう一方で虐げられ

た労働者は体制変革に蜂起するという科学的社会主義論が統合された理論体系を構築し、19世紀の西欧社会は幸福で美しくみえるにもかかわらず、その内実は資本家ばかりが富を蓄積して強大な権力をもっている社会であるから、そこで搾取され虐げられ窮乏化した労働者の逆襲により転覆され、キリスト教のいう千年王国としての共産主義社会が実現するという明確な現実的な理論を創っていたのであった。

つまり、西ヨーロッパのもっとも幸福な時代とされる19世紀のさなかに、この繁栄する社会が崩壊するなどという当時は誰も思いもつかない主張をするばかりか、その崩壊のあとにはニヒリズムが到来するという予言までしたのはニーチェの方であったが、ニーチェこそキリスト教は弱小貧者のルサンティマンを幻想のなかで解消させる奴隷の道德だという裏目読みをしていただけでなく、神まで死に到らしめる論理を創っていたために、その理論の行き着く果ては反ユートピア的ニヒリズムの到来という暗黒の予言にならざるを得なかったのに対し、キリスト教の正統な継承者であるということが出来るはずのマルクスは、19世紀的に繁栄し幸福そうにみえる同じ社会をとりあげて、そこには神が憎んでいた少数の強者・資本家階級と、神が愛している大多数の弱者・労働者階級とが存在し、相互に富の分配をめぐる争っているイエスの時代とも一面通じるような、矛盾に満ちた資本主義という階級社会であるとし、この階級闘争の果てにはキリスト教の救済教義どおりに弱者が強者を打倒し、神の国あるいは千年王国としての共産主義社会が構築されるという明るい展望をもつ理論となっていたのである。

マルクスとニーチェの19世紀恐慌論

このように19世紀後半という時点からのマルクスとニーチェの将来展望が明暗あるいは希望・絶望といった二つの相反する方向に別れるようになった理由は、その19世紀にはじまって10年周期で循環するようになった恐慌に対する捉え方・評価の相違が両者の論理を分けたことにあったといえるであろう。18世紀の後半に産業革命を達成して工業国家になっていた当時の資本主義諸国のなかの最先進国であったイギリスでの恐慌は1825年にはじまり、やがて当時の後進国ドイツにおおよんでほぼ西欧諸国全体が足並みをそろえて、1836年、47年、57年、66年、73年とほぼ10年毎に周期的・循環的に襲来して市場を不況にし、社会に混乱をもたらす恐慌が、それまでにない現象として西欧社会に猛威をふるって経済をくりかえし破局させ、人びとの生活を苦しめていることが、古代ユダヤ・古代ローマ以降二千数百年にわたって営々とヨーロッパに形成されてきた修道院での禁欲・純潔・清貧、あるいはマックス・ウェーバーのいう勤勉・節約などを倫理的中核にする厳格・清潔なキリスト教文化が、経済成長のなかで徐々に、そしてやがて急速に爛熟し退廃的な華美で奢侈なものに変わり、またただちに恐慌によって崩壊させられていく事態をニーチェはおそらく永劫回帰とみて、破滅的なニヒリズムという「最高の諸価値が無価値になる」神の死の時代がくると予感し、予見しているようなのであるが、このように神の死・ニヒリズムがこの世にもたらされるのはキリスト教の教義の解釈や神の国の内部に原因・問題があったのではなく、実際には現実の社会において周期的に循環して永劫回帰の一部として発生する恐慌によって引き起こされる経

済的破局・社会的混乱を通じて終末へと向い、この世界最大の事件である「神の死」がもたらされていることを、隠喩を連ねて予言していたのであり、ニーチェのいう神の死によるニヒリズムの到来という主張は一種の終末論といえることができ、その根底には19世紀にはじまり10年毎に周期的に襲来する恐慌という現実が存在し、害悪的経済破壊作用の影響を受けて破局するさまを神の死に見立て、恐慌の結果の社会的混乱状況をニヒリズムとしていたといえることができよう。

このようにニーチェが論究する神の死・ニヒリズムとは、人びとに緊張の拷問を強いる現実の永劫回帰としての恐慌の産物なのであり、19世紀の恐慌とは当時その原因がわからなかっただけに、これほど恐ろしいものはなかったに相違なく、そのため聖書のなかでもっとも恐ろしい記述にみちている「ヨハネの黙示録」におけるハルマゲドンを想起し、そこにいたるまでの次から次へと襲ってくる災害や天変地異、苦難を恐慌の循環と重ねあわせて論理をつくったといえてよいであろう（後述する）。

またくりかえしになるが、ニーチェが恐慌や社会倫理を形而上学的な問題として捉えて神の死とかニヒリズム、あるいは永劫回帰など実際には見ることも具体的に説明することも、検証することもできない観念的な理論を創っていたのは、キリスト教は弱小貧者がそのルサンティマンをねじまげてつくっているのだ、と裏目読みして解釈したと同じ手法で考えられた観念のなかだけで操作された論理であるのに対し、マルクスは世界のすべての存在・事象・現象などの具体的現実をその本質の次元にまで論理的抽象をして法則として掌握しているので、そうして造られた一つ一つの名称的言語・タームおよび理論には現実の存在・現象そのものの意味や

規定が表現されているのであって、たとえば恐慌という言葉：タームをみればまず現実の現象を指しているのであるが、そこからその言葉の意味する本質の解明をし規定されていき、その統合により概念となっていくという方法を取りながら弁証法的理論をつくっているので、恐慌現象そのものをいわゆる社会科学として理論化できているのであった。

ニーチェの隱喩的恐慌論の効用性と時代批判性

ここからは隱喩を超えて直接に恐慌を問題にしていきたいのであるが、ニーチェが神の死とともに到来するとしているヨーロッパ文化を破局させ、あらゆる価値を無意味とするニヒリズムが支配する時代とは、大まかな考察になるが、ヨーロッパのほぼすべての人びとは毎日曜日にはキリスト教会に通って礼拝をして神からの啓示・命令・教えを受けて日常生活の核にし、自らの生活の仕方や生き方の決定をキリスト教的倫理に従っていることや、人が生活する社会の規範やモラル・道徳、あるいは日常的に接する文化・学問・芸術等の人の生きている基盤のすべてを支える精神的支柱、および実生活のため物質的基盤・必需品等の活用・消費の仕方ともキリスト教のモラルに従っているなど、ヨーロッパのすべての人びとの生活はキリスト教抜きには考えられない社会のなかに生きているはずなので、人びとの生の規範・倫理となっていたキリスト教の「神は死んだ」ということになったなら、すべての価値基準は無意味になり「何をなすべきか、いかに生きるべきか」が不明になり、「神が存在しないなら、何をしてもかまわない」という精神世界の大混乱がもたらされるという事態の到来の予言なのである。このニーチェのニヒリズム論理の根柢に単にキリス

ト教文化の衰退だけでなく恐慌の存在があったということになる。

そこで、ニーチェによればニヒリズムを到来させて神を死に到らしめ、永劫回帰する恐慌は、実際にどのように猛威をふるっているか現実に即してみていくならば、ヨーロッパでは18世紀後半からイギリスが蒸気機関の発明というイノベーションを契機として世界に先駆ける産業革命を成功させて経済の飛躍的發展現象を起こし、ヘーゲルが「欲望の体系」と規定したような利己主義的なむきだしの欲望の充足を追求をする新しい利権争奪の弱肉強食的な競争を熾烈化させるとともに、競争に勝利した者は増大した所得が豊かな生活を可能にするので拝金主義、奢侈のみで精神性のない空虚・華美な物質尊重主義の横行など文化的退廃も進行し、まさに隣人愛・禁欲のキリスト教とは反対の傾向をもつ風潮が貫く社会や文化が出現してき、一般の人びとの生活や考え方も精神なき物質中心主義に傾斜させていくような社会が形成されているのであるが、じつはこのような市場中心の経済活動を基盤におく社会こそマルクスが資本主義という命名して批判し、否定してやまなかった体制なのであったから、この状況に対するニーチェの批判も西ヨーロッパの一般国民がこの非人間的な空疎無感動な風潮に強烈に反対・反抗しないのは、キリスト教精神自体が病んで弱体化しているからだけでなく、もともと弱者・敗北者のルサンティマンを逆転させた反自然的な自己満足的・負け惜しみの倫理であり、奴隷の道徳であるため、本来禁欲・勤勉であるべきクリスチャンが、豊かさに負けて人間の利己的な本能的欲望をむきだしにするいわゆる自然的な資本主義経済には反対しない現実肯定の弱腰的な生き方や精神諸力の弱体化を示していることに、ニーチェは否定的評価をする倫

理的大問題の提起をしていたのであった。

このように19世紀ヨーロッパ資本主義社会・経済は一方で生活の豊かさをもたらし、先にツヴァイクやカスーの引用文でもみたような、一見幸福な美しい時代を形成しながらも、その物質的豊かさがもう一方でキリスト教に反する行為を取らせるほど精神を墮落させ、緊張を欠いた生き方が一般化していたのに対し、その弛緩した物質的豊かさも、精神的衰弱も10年周期で襲来してきては市場経済を破綻・社会を混乱させる恐慌によっていずれも踏みつぶされ、そのたびに産業体系が破局し、国民生活が経済的に破壊され困窮化していく現実的恐怖の感覚的理論が重層化されていたのであったから、ニーチェは明確に恐慌について論述することはしてないが、恐慌が19世紀ヨーロッパ資本主義の経済的・社会的破局・混乱のなかに神の死という強烈な論理やニヒリズムの到来という現実をみていたのであった。(さらに、マルクスの方はこの恐慌の循環的発生が資本主義の崩壊につながっていくことを洞察していたとみられていた。)

マルクスもニーチェもキリスト教文化のなかで育ち生きていた

ただ、くりかえしになるが、19世紀の西欧諸国の資本主義は勃興期にあり、急速に生産諸力を拡大・発展させ、各社会全体の富の蓄積を増大させただけでなく一般市民の生活まで向上させていたので、さきにもたように幸福な時代、あるいは安定の黄金時代が到来しているという認識が一般的であったらしいのであるが、そこに蔓延している精神性なき享楽的物質優先主義的風潮に対し、宗教的に深く警度な信仰をもつ家庭に育ったマルクスとニーチェはともに

(ニーチェは父も祖父もルター派の牧師であり、母の家系も牧師であったというし、マルクスの方は、両親ともラビ〈ユダヤ教の法律専門家〉の家系であり、マルクス誕生前に父はルター派に改革しているが、マルクスは12歳まで学校に通わずユダヤ教の環境で教育を受けていたという。小室直樹氏はマルクスの理論の骨子はユダヤ教そのものといわれている。『宗教原論』) 理性的にはもちろん、身体のかなかに流れている感性でも嫌悪し、否定的にとらえていたに相違なく、ニーチェは神に代る超人を誕生させて、豊かさにおぼれて安閑としている民衆を叱咤し、人生とは苦難・苦痛が連続する永劫回帰なので、こうした困難を運命愛として引き受け、人生に苦しんでも「この生をもう一度」とこだわりなくいつてのけるような覚悟をもって生きることを教唆・要請するとともに、(少々ニーチェの理論を矮小化しすぎているかもしれないが、さらにつづけると)、もう一方、同じ19世紀西欧社会において安寧をむさぼる市民たちにはこの繁栄しているようにみえる社会に10年周期で人びとを苛烈に拷問するように恐慌がくりかえして襲ってくる循環のなかで現実では突然の社会経済の転倒・停止・民衆・市民の生活の困窮などの破局が、深いキリスト教の素養をもつニーチェにはこの世の終末あるいは断末魔としてとらえたのであろう。この世・この社会のすべての存在の価値が無意味化する思想的混迷が起きだしたとし、その果てに「最高の諸価値の価値剥奪(無意味化)」という「神の死」が来るとしているのであった。つまり、安定と幸福にひたりこんでいる愚かな民衆には分からないだろうけれど賢者にはみえる、「10年毎に息苦しい苛責ない拷問を受けるように結末に向かっていくのだ。」それは「ヨハネの黙示録」が予見したような「戦争、飢饉、疫病、大災害、

虐殺、経済破局、苛政、殉教、そして最終的にはハルマゲトンが襲ってくる」のだ、しかもヨハネの黙示録ではその後にイエスが再臨して千年王国を開いてくれるのであるが、いまは「神は死んだ」ので、ニヒリズムが到来するのだという恐ろしい予言をしていたのであった。しかも、梅本克己氏によれば、この予見は20世紀には的中しているというのである。

マルクスの革命論はヨハネの黙示録を継承している

では「破局的な恐慌が生みだす社会情勢の中での労働者階級の運動によって、資本主義は崩壊する」というマルクスの予測はなぜ20世紀に外れたということになるのか。いまになれば、20世紀になってマルクス主義の名のもとに革命をして創設した共産主義体制なるものは、マルクスが想定していたような生産手段を私的所有から共同所有に止めた社会ではなく、共産党という特権階級が国家を所有するという独裁体制だったので、マルクスの予測が外れていたと簡単にいうことができるだけでなく、20世紀の革命は資本主義がつくった公正は欠くものの自由で豊かな体制を逆行させ、封建時代に戻すような結果をもたらしているため、いつか負の意味をもつようになっているので、二つの世界大戦、大恐慌そして革命は20世紀の混乱・破局の象徴で、まさにニヒリズムが到来した姿だったといってもよいであろう。

ただししかし、恐慌そのものを明確に社会科学・経済学の対象として理論的に把握したのは、19世紀においてはマルクス以外いなかった。さきほどからみているように、一般的には19世紀は安定した幸福な時代といわれるだけでなく、資本主義特有の生産諸力の発展によ

り、「全般的に生活水準が向上し、多くの人々は衣食住の原始的欲望を越えて、贅沢品への欲望を持つようになった。しかし、贅沢品は間もなく生活必需品になる。『現代思想』」といわれるようになるほど、社会的進歩も急速で多くの人びとを満足させていたが、マルクスは『共産党宣言』でいう、贅沢品が得られたからといって無自覚に満足してはいけない、「ブルジョワジーは、かれらの100年たらずの階級支配のあいだに、過去のすべての時代をあわせたよりも、大量で巨大な生産諸力をつくりだした」ことによる賜物なので、必ず復讐されるに相違ないのである。

『共産党宣言』で、「ブルジョワ的な生産および交通諸関係、ブルジョワ的所有諸関係、このように強力な生産および交通手段を魔法でよびだした近代市民社会は、自分が魔法でよびだした地下の諸力をもはや支配できなくなった魔法使に似ている。この数十年の工業および商業の歴史は、まさに、ブルジョワジーとその支配との生存条件である近代的生産諸関係にたいする、所有諸関係にたいする、近代的生産諸力の反逆の歴史にほかならない。商業恐慌をあげれば十分である。それは、その周期的なくりかえしのなかで、ますますきびしく、全市民社会の存在自体を、問いつめている。……恐慌においては過剰生産という疫病が発生する。社会は突然、一時的な野蛮の状態におしもどされたことに気づく。一種の飢饉。一種の全般的な破壊戦争がそのすべての生産資料をうばいとったようにみえる。工業、商業は破壊されたようにみえる。なぜか。社会があまり多くの文明、あまり多くの生活資料、あまり多くの工業、あまり多くの商業をもっているからである。社会が利用しうる生産諸力は、もはや、ブルジョワの文明とブルジョワ的所有関係を促進するのに役だた

ない。反対に、それらは、この諸関係にとってあまりに巨大になったし、それらは、全市民社会を無秩序におとし入れ、市民的所有の存在をおびやかす。ブルジョワ的諸関係は、それらが作りだした富をいれるいは、窮屈になった。——どうやってブルジョワ階級は恐慌を克服するか。一方では大量の生産諸力をむりに破壊することによって、他方では、あたらしい市場の獲得とふるい市場の一層根本的搾取によってである。ようするに、もっとも全面的でもっとも強力な恐慌を準備し、恐慌を予防する手段を減少させることによってである。／ブルジョワ階級が、封建制をうちたおすのに使った武器が、いまやブルジョワ階級自身にむけられる。しかもブルジョワ階級は、自分に死をもたらす武器をきたえあげただけでなく。この武器をとるようになる人びと——近代的労働者・プロレタリアートをつくりだした。」というように、マルクスはすでに1848年には正確に恐慌の本質を把握していたのであった。(イギリスで世界初の恐慌が発生したのは1825年でその後1837年、1847年とイギリスだけにしか恐慌が起きていないのに、1848年の段階で、マルクスが現在でも通用する恐慌論をつくっていたとは驚異である。)

ただ、マルクスの理論的失敗をあげるとすれば、ユダヤ教・キリスト教の精神を継承して弱小貧者の側に立って、強者、支配者である資本家階級を不正なる悪者として糾弾し、かれらがいかに弱者から利益・富を詐偽的に略奪するかという謀略をあばき、労働者階級の正当性を証明するところまでは実証的理論の範囲内の論理としては成り立つのであるが、弱い正義の労働者階級が強い悪者である資本家階級を打倒して、私的所有関係を共同所有に変更せよという指令はキリスト教の教義・論理を逸脱してしま

い、単なるイデオロギーになってしまうということなのである。

つまり、西欧キリスト教社会では神はつねに弱小貧者の側にあり、強大富者即ち支配者は神から疎まれていて存在自体が不正で悪なのだから、強者・支配者を打倒することは決して倫理に悖らないという思潮に貫かれているようにみえる。いくらマルクスといえ、経済学的に資本家が労働者からいくら剰余価値を搾取するという悪業をしても、そして階級として悪業が続行できるよう労働者階級を抑圧・支配する体制をつくっているとしても、歴史的にみれば古代の王や皇帝が奴隷を、中世の封建領主が農奴を、資本家以上に苛酷に搾取していたのだから、資本家階級が労働者階級を搾取しているからというそれだけの根拠で、資本家階級が私有する生産手段を社会的共同所有に変更してしまえなどと逆略奪の指令ができるはずがなく(じつは『共産党宣言』では公然とブルジョワ支配の転覆などの革命活動を提唱しているが)、体制革命の根拠は聖書にある。どこをとってもよいが、例えば最後の審判でイエスは神の国への入国を許す者はイエスが身をやつた弱小貧者に手をさしのべた者であり、弱小貧者を邪険にしたり無視した者は永遠の業火に焼かれることになるように、この世で労働者を酷使した者は裁かれ打倒されて当然なのだという暗黙の了解が成りたっていたのではないだろうか。

ただしかし、キリスト教の教義・倫理では、復讐は神がなすべき事柄で当事者・人間が手を染めてはならないように、革命も神のなすべき事柄だというべきかも知れない。『マリアの賛歌』でも、「主はその腕で力を振るい……権力あるものをその座から引き降ろし、身分の低い者を高神の御技によるべきものであり、大革命である強弱・貧富が逆転する最後の審判もイエ

スー人が主催しているのである。これをルサンティマンをもつ弱者・労働者にゆだねるならば、「汝の敵を愛せ」というキリスト教の鉄則はふみにじられ、革命の場に憎しみがもちこまれ、ルサンティマンをもつ正義な弱者ゆえ、歯止めのきかない闘争が拡大・持続することになる。20世紀のマルクス主義の革命が失敗した事情はこのようなキリスト教の教義を逸脱したからだとみてよいであろう。(後述する)

共産主義革命の原型はヨハネの黙示録にある (再論)

しかし、なんといつても革命の根拠となる最上なものは、さきにもみた「ヨハネの黙示録」である。マルクスが『資本論』で分析する資本主義体制のなかで資本家に搾取・抑圧・支配され、低賃金で苛酷労働を強いられる労働者はユダヤ人で資本家は支配者のローマ人に擬すことができ、黙示録ではイエスがヨハネの幻想を通して、ローマに迫害され、大量虐殺されるキリスト教徒に激励と警告を与える内容で、幾多の苦難がさまざまにふりかかり、じつにこれでもか、これでもかこの世が終りになっていく災害の描写がつづき、最後にごく近く「大地震が起きて、太陽は毛の粗い灰地のように暗くなり、月は全体が血のようになって、天の星は地に落ちた。……天は巻物が巻き取られるように消えてなくなるように消え去り、山も島も、みなその場所から、移された。(6章12-14)」という天変地異が起きたあと、さらに「新たな災いが襲う。地はカリカリに焼けこげ、海は地になって汚染され、太陽、月、星は暗くなり、野獣は解き放たれて地上の住民を餌食とし、暴虐な戦争と疫病が襲う。これらの災いに加えて、大いなる獣——反キリスト——が登上し、地

上にさらなる破局をもたらす。その後……さらに7位の天使が現れる。彼らは神の怒りで満たされた巨大な鉢を持っている。……各天使は自らの鉢からそれを地上にぶちまけ、さらなる破局をもたらす——その頂点において、神の敵である大いなる都『大バビロン』が破壊される(18章2)」そして「ついに最後の戦々が始まる。キリストが白い馬に乗って天から現われる。彼は反キリストとその軍を相手に戦い、彼らを火の池に投げこんで永遠に罰する。その後、1000年に及ぶユートピアが地上に到来する。この間、悪魔は底無しの深淵に封印されているので、害を為すことができない。この1000年の後、悪魔が一時的に解放され、それからついに終末が来る。死者が全員復活し、裁きを受ける。『命の書』に名前が書かれている者には永遠の褒美が与えられる。『その他の書』に記されていた者は永遠の罰を受ける。それから死が火の池に投げこまれ、死者の国である陰府(ヨミ)もまた投げ込まれる。」(引用はバート・D・アーマン『破綻した神キリスト』から)

「ヨハネの黙示録」について田川建三氏は『キリスト教思想への招待』において、ローマ帝国とユダヤ民族・キリスト教徒の関係についてニーチェ的読み込みをされている。「桁違いに巨大、強力な世界帝国の軍隊、世界に並ぶものもなく、その軍事力を背景に、好き勝手なことを世界中でやらかしている軍隊。それが、いきなり自分達の上に侵略してきて、頭の上から爆弾を雨あられと降らす。自分の子どもも、家族の誰かれも、みな殺されてしまった。知人友人で死んだ者も多い。その悲しみを、この憤りを、どこにぶつけたらいいのだ。どんなに憤っても、どんなに悲しんでも、死んだ者が慰められることはありえない。しかも、これだけの殺戮

をやった連中は、まるで何事もなかったかのよう
に、ますます経済的に繁栄し、のうのうと贅
沢を楽しんで生きている。それどころか、我々
を大勢殺しておいて、いいことをやってやった、
などとうそぶいている。このまま終わってもいい
のだろうか。いや、このまま終らせるわけには
いかない。……侵略の犠牲者として生命を失っ
てしまう。あるいは、失わないまでも、生涯、
苦境の中で耐えながら生きていかなければなら
ない。このままでいいのだろうか。人間は復讐
してはならない、という。復讐は神がやって下
さる、と。しかしそれなら『聖なる、真なる神よ、
あなたはいつまで裁かずにいるのですか。流さ
れた我々の血の報復をなさないのですか（ヨ
ハネ黙示録6・10）』、黙示録の著者は、終末の
話を書こうと思った。多分、終末の審判の時に、
その裁きが行なわれるという話を。」といわれ
て、黙示録が書かれた意図・動機を解明され、
その憎悪ゆえにローマの本質は的確に捉えてお
り、「ともかくローマの町とその繁栄にあずかっ
た世界中の人々の崩壊を、くり返し、くり返し、
何度も、何度もくどいほど描きまくる。これでも
か、これでもかというほどに。その怨念のす
さまじさは何ともいえない。……まさに数え切
れないほどの大勢の人々が、こういう怨念をか
かえて生き、こういう怨念をかかえて死んでい
ただけだから。いったい何度ローマの崩壊が叫ば
れることか。……著者は何度も何度も『バビロ
ン』は倒れたと叫ぶ。この書物ではローマの都
はバビロンと呼ばれる。ローマの帝国の支配を
『淫行』にたとえる。彼らユダヤ人にとっては、
神の禁じた悪事の象徴が淫行であり、悪いこと
は何でも『淫行』であった。黙示録の著者は、
この単語で、自分たちの繁栄に酔いしれた人々
の姿を表現しようとしている。その魔力に引か
れて、自分たちも加担してしまった人々のこと

を。……更に彼は続ける。いやまあ、いくらで
も続ける。『かつてなかったほどの大きな地震
があった。大いなる都（バビロン）は、三つに
裂かれた。また諸民族の都市も倒れた。大いな
るバビロンのことを神は思い出したのである。』
彼はまだやめない。……『倒れた！ 大いなる
バビロンは倒れた！ それは悪魔どもの住む
所、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れ、
憎まれた鳥どもの巣窟であった。すべての民族
が彼女の淫行の怒りの葡萄酒を飲み、地の王た
ちは彼女と淫行を行い、地の商人たちは彼女の
贅沢の力にあずかって豊かになったのだ（18・
2-3）』（注：マルクスとニーチェが19世紀西欧
社会と文化を忌避・嫌悪・否定していることと、
黙示録のバビロン否定の言葉は重なるというて
よいだろう。）……天の声は言った。『我が民よ、
彼女から離れ去れ。彼女の罪に参加してはなら
ぬ。彼女の災害にまきこまれないようにせよ。
彼女の罪に参加してはならぬ。彼女の罪は積
もって天にまで到達している。神は彼女の不正
の数々を覚えているのだ。彼女が他に対してな
したのと同じことを、彼女に返してやれ。彼女
の仕業に応じて、それを2倍にして返してやれ。
彼女が注いだ杯の中に、その2倍の量を注いで
やれ。……その同じだけの分量の苦痛と悲しみ
を彼女に与えてやれ……（18・4-7）』……こ
のすさまじい叫び。だが、これを叫んでいるの
は、ヨハネ黙示録の著者だけではないだろう。
……『それ故に、1日のうちに、彼女の災害が、
死と悲しみと飢餓がやって来るだろう。彼女は
火で焼かれる。力強き主なる神が彼女の審判者
なのだ。』……この著者が、ローマ帝国の繁栄
をいかに地中海の海運経済を中心に見ていたか
がよくわかる。彼が呪っていたのは、単にロー
マ帝国の権力者だけではない。それにあずかっ
て大儲けをしていた連中、その下部構造に連っ

て適当に儲けていた連中、その者たちのすべてがこの権力を支えていたのだ。そして、そのせいで、この権力は多くの者を抑圧し、その血を流すことができた。……だから、この『大いなる都』は滅びなければならない、その経済的繁栄の故に、まさにその故に、多くの土地で人々は食うや食わずの生活をしながら、時々襲いかかって来るローマ帝国の力によって生命を奪われていた。……だからローマの繁栄は消えなければならない。後は、救われる者たちが救われて、全世界で、古今東西すべての世界で、不当に殺され、不当に苦しみ、不当に貧国にあえぎ、正義を求めては殺され、正義を求めて弾圧されてきたすべての人々が救われて、よかったと大団円になる。……『千年王国』が語られ……バビロンが消え去った後、天の都、新しいエルサレムが出現する。」という解明をされた後、「このぞっとするような、すさまじい怨念と憎悪の積み重なるの書物を前にして、私はただただ慄然とせざるをえない。」という感想をもって結んでいられるが、革命とはこういうものかもしれない。

こうした事情を、犬養道子氏は正統的に解明されている。「悪はさまざまの様相のもとに立ちあらわれつづける。地をおおうテロを、狂気の拝金主義も、弱食強食の政治も、飢饉も。が、神の審判は存在する。それがなかったら、道徳の意味は地上においてなくなる筈である。聖なる力による決算がつかないものならば、今日、明日、人を殺しても富を得、権力を得て快樂のうちに暮らす者こそ知恵者・賢者であろう。いかなる手段を講じてもあらゆる金銀財宝・奢侈品をわがものにする(象徴の)バビロンこそ賢者であろう。が、審判はまちがいなく来る。すみやかに来る。白い馬を駆って『忠実なる者』と呼ばれる人の子があらわれる。彼の名はまた

『(神の)言葉』である、地上の『賢い』い権力と金力は一切をあげて彼に最後の戦いを挑む。しかし審判は行われる。確実に忠実に。そして血と悪と苦に満ちた地は『おもかげすらのこさず遠くはるかにへだたって行った』。そのとき——新しい天と新しい地が開かれる。その新しい天地の中で、死はもはや、存在しない。人の眼に涙はもはやない。……苦しみを経て来た者たちは勝利の白の衣を着て、喜悅のうちに新しい町で生きる。」と解説されている。

もちろん、「ヨハネの黙示録」の叙述はこんな簡単なものではないが、イエスの処刑・復活の後に入信者が増加したがローマ帝国内で弾圧されていたので、信者たちにどんな困難がふりかかろうと、信を捨てずに忍べるならば必ず神が救済してくれるという、犬養道子氏によれば「旧・新全聖書のレジュメであると同時に人間の地上の歴史そのもののレジュメであり、且つ限りない希望の『終末の書』であることを示し出す。……(終末に際しイエス・キリストは)、『見よ、もはや間近い、わたしはすみやかに来る』と、そしてヨハネは新約聖書最後の一行を——否、旧新全聖書の最後の一行を歓喜に満ちあふれる次の言葉によって結ぶ。『アーメン、主イエスよ、来りたまえ！ねがわくは主の愛の賜すなわち天地一新の光栄ある永却がすべての者と共に在るように！』」と結ばれているように、1世紀のローマ帝国支配下の現実が、神のかかわる世界の出来事か、あるいは宇宙の事象なのか、さだかではないが、イエスが愛する弱小貧者が天変地異や悪魔や、さらには飢え、疾病、戦争などによって徹底的にいためつけられ・塗炭の苦しみを受け、破局的終末を迎えるのであるが、神を信じて苦難に忍え抜いていると、終末の極限にイエスが再臨し、全世界を逆転し弱小貧者は神の国へ導かれて救済されると

いう論理とみることが許されるであろうが、マルクスの革命論はまさにこの論理を踏襲したもので、徹底的に資本家階級に搾取・収奪・抑圧・支配を受け、いためつけられた労働者階級が歴史的法則という神の導きで、その窮乏が極限に追いこまれたとき突然に自ら蜂起して資本主義を打倒・転覆して、千年王国である共産主義社会を構築するという論理にしているといつてよいであろう。(ただ、神の国が2000年たってもまだ来ていないように、真の共産主義社会もまだ来ないのは当然といえよう。その理由は、神の国も共産主義も到達目標であるとともに、現実での行為規範でもあるという意味の二重性をもつ概念・理論だからである。)

19世紀の西欧キリスト教諸国間の不均等発展性

このような生産諸力の発展・経済成立について、きわめて効果的に作用する資本主義的市場経済体制は、18世紀末に産業革命を成就させ工業化社会を形成したイギリスにおいてはじめて成立したのであるが、その結果何度も何度も恐慌に見舞われながらもイギリスは世界の工場といわれる商品の生産・輸出大国に成長して世界市場を制覇することになる。この事情を根井雅弘氏の『ケインズを学ぶ』にみると、「1851年、ロンドンで第1回万国博覧会が開催されましたが、それはまさに『世界の工場』としてのイギリス工業の圧倒的な優位を全世界に誇示した象徴的な出来事でした。実際当時のイギリスは、工業生産・金融・貿易・海運・植民地の領有・海外投資のどれをとっても、世界に比肩するところのない経済大国だったのです。(例えば、その頃のイギリスは、工業生産の一つの目安である鉄の生産量において、世界の53%を

占めていたのです)。イギリス史では、1850年から73年までに至る繁栄を『ヴィクトリア朝大好況期』と呼んでいます。」といわれているのであるが、ここから類推するならばイギリス国民は現実・世界の生活において満足・喜びが得られるから、神は市場のなかに存在しているという確信がもてるので、犬養道子氏が解明されていた神の国とかかわりながら得ることができる聖なる喜びとか精神的歓喜とは、ほど遠い次元の世俗的な拜金的喜びに墮すると批判される面をもつようになることもつけ加えておきたい。

さらに1886年から1902年にかけてC・ブースが3回にわたりロンドンの貧困調査をした結果、全人口の30.7%が貧困線以下であり、1899年にはS・ラントリーがヨーク市で調査し、第1次貧困9.91%、第2次貧17.93%、計27.84%という数字が発表され、「ヴィクトリア朝大好況」のすぐ後にこれほど多くの貧困者が存在することが、イギリス国民を驚ろかしたというが、同じ時期ロンドンに亡命していて積極的に資本主義を批判したマルクスの理論をまつまでもなく、19世紀のイギリス資本主義社会は世界最強といえまだ大きな弱点をもっていたのであった。

では「神は死んだ」といわれる以前、つまり「最高の価値」である神が健全であった時期とはどのようなものであったかふりかえってみると、もっともはやく資本主義的市場経済が確立していたのはイギリスであり、社会の成員が市場において分業しつつ各人が自らの利益の増大化を追求するむき出しの利己主義的欲望の激突が渦巻く争奪競争の場をつくりながらも、競争により総体の利益が拡大するという効果を発揮していたことは確かめられていたうえ、その裏面の短所とされる欲望追求競争の結果として

優勝劣敗が顕在化して所得格差の拡大や財（商品）の取得を不均衡にしてしまうという市場の欠陥・失敗というか、あるいは市場の負の側面である不公正・矛盾・無秩序などに対して、市場内部にそれらの理不尽さを調整・是正して全体を調和をさせるように働く力が内在しているとされてきたのが、経済学の創始者アダム・スミスが名づけた「神の見えざる手“an invisible hand of God”」であったことはよく知られているとおりであり、19世紀になるまで市場はイギリス社会に富という正の成果を効果的に蓄積させ、その背後にまさに見えざる神の恩恵を感じさせるものであったはずである。

ところで、スミスの神の見えざる手による市場の調整が効果を収めなくなったことが恐慌を発生させてしまったので、当時の後進国ドイツのニーチェは恐慌の発生に神の死をみていたという類推ができるであろうか。いずれも神も比喩として使われているのは当然あるが、それにしても二人の偉大な理論家が別々に比喩とはいいながら資本主義の発展とともに経済的繁栄・豊かさを創り出す原動力の象徴になっていく市場が順調に活動しているときは、そこから生まれる不均衡には神の手が働いてひとりでは是正・調和され、その市場に突然不均衡が突出し恐慌を発生させて経済的不況に陥らせて多くの人びとに不公正な不利益がもたらされるのは、正義・公正の神は死んだからだというつながりになるという論理の遊びが許されようか。

ただ、根井雅弘氏はさきに引用した文のつづきに「1873年から世紀末におよぶ経済停滞は『大不況』と呼ばれています。しかし、留意しなければならないのは、それが『不況』とは言いながらも同時に『進歩』の側面も持っていたことです。というのは、その時期には、イギリスの典型的な輸入品である原料と食糧の価

格が工業製品のそれと比較して相対的に下落したため、交易条件がイギリスに有利になり、実質賃金が着実に上昇したからです。また、イギリスの経済成長率も、以前と比較すると確かに相対的に鈍化したとはいえ、この時期に顕著に低下したわけではなかったのです。」という、通念に反する論理を述べられているが、この論理に照らしてみると、マルクスとニーチェが恐慌を体制崩壊の危機の到来として捉えていたのは、資本主義として後進国だったことと、両者ともユダヤ教・キリスト教の論理を基礎においていたことが危機を終末への事象として切羽つまってみえていたので、経済的には豊かで、余裕のある先進国の理論とは異なるものをつくっていたといえよう。くりかえすなら、19世紀のイギリスは大不況下においても労働者の生活は破壊されず、むしろ実質賃金は上昇していたので、恐慌だからといってさわぎたてることはなかったということになるのだろうか。

恐慌の後進国的理論把握は大思想を生む

キリスト教や世界・論理を裏目読みするニーチェの論理をさらに裏からみってみるならば、ニーチェは19世紀のヨーロッパにおいて10年毎に周期的に循環して発生しては破局と混乱などの負の結果をくりかえしもたらす恐慌という危機によって、キリスト教の「神は死んだ」ため、「永劫回帰」の一環である周期的に循環する恐慌のため人は「緊張の拷問」をされ、意味もなく苦しみつづけるニヒリズムが到来すると予感・予言するのであるが、19世紀のころの恐慌は実際には市場経済を破局させて社会・国民生活を多少混乱させるだけであり、イギリスにいたっては労働者の実質賃金が向上するという実状がみられるので、20世紀になって大恐

慌に見舞われるまではほとんどの理論家、ほとんどの国民は恐慌を一過性の自然現象的な災害のようなものと考え、確かに回を重ねるごとにその規模は拡大し激化はして被害は大きくなっていくものの、やがて一定の時間がたてばまた好況が戻ってくると信じられていたとおり、単に市場が消費者の需要を上回る商品（資源）を生産し供給したため、需要と供給との均衡のくずれが生じ、その不均衡が大きすぎるようになると恐慌が発生するというのが正確な真実の理由なのであって、わけのわからない自然災害のようなものが襲うのでないどころか、まして「神は死んだ」から恐慌になりニヒリズムが到来するという観念の世界での恐慌についての解釈は、現実的根拠のない妄想だといってもよいであろう。しかし、その妄想こそニーチェの大思想を生む結果になっていたことを覚えておかなければならない。

ニヒリズムの到来について妄想的論理を念のためもう一度ニーチェに聞くならば、「ヨーロッパ文化は、久しい以前から、10年また10年と過ぎるにつれて増大する緊張の拷問をもって、一つの破局に向かうかのようにして、動いてきた。不安げに、荒々しく、また性急に、それはあたかも終末に向かおうとして、もはや自分を省みることなく、いや自分を省みることを恐れている大河に似ている。」と、単に市場における需要・供給の不均衡、あるいは同じに生産・消費の不均衡という経済的問題だけを原因とする恐慌をじつに鋭く捉え、さらに美文をもって説明しているのを敷衍するならば、あたかも見えない巨悪の大洪水・大暴風雨が激しくあるいはじわじわと全人類の生命・生活を破滅させて、世界を終末にまで向かわせようとしている断末魔的危機に対する、恐怖感を主観的に解釈した比喩的概念の羅列をして、非常に抽象的な論理

の駆使によって恐慌が西欧に築かれてきたキリスト教文化や資本主義的富の蓄積を殲滅させようとしていると、自らも戦慄しながら人びとを恫喝をするかのように神の死という最大事態の隠喩を使ってニヒリズムの到来を結びつけた予言は、ニーチェらしくヨハネの黙示録の終末にハルマゲドンが襲来するだけで、キリスト教にとってもっとも重要な神が来臨しない状況を指している論理なのであるが、その洞察は極めて鋭い時代の危機の把握したいたのであったものの、しかしどうみても単なる市場の過剰生産・縮小消費という不均衡を原因に発生する恐慌を、経済問題とかかわりなく大げさに神の死になぞらえ、そのあと最高の価値まで無意味化されるニヒリズムが到来するというのは、やはり妄想的理論だといってもよいであろう。（ニーチェのニヒリズムでは終末にハルマゲドンが襲来するだけで神の再臨はない状態を指すのに対し、『ヨハネ黙示録』のとおり最後にイエスが来臨して、神の国がひらけ、千年王国が出現するという論理は、キリスト教の正統な継承者マルクスの方に革命という論理になって受け継がれている。）

20世紀はニヒリズムの時代なのか

確かに、安定して平和であった19世紀西ヨーロッパ社会が20世紀になってからは一転し、第1次世界大戦・ロシア革命・アメリカの勃興と西欧の没落・敗戦国ドイツの経済大混乱・大恐慌・ファシズムとニューディール・第2次世界大戦・冷たい戦争・中国革命等々と（さきほどからみてきたように、本来なら20世紀に成立したマルクス主義に依拠した革命は、虐げられた労働者階級を解放し、生産手段を共同所有にする体制をつくるはずだったが、まった

く逆の体制をつくっているのです、ここでは革命は戦争や恐慌と同じ負の出来事として並列する。) どれ一つとっても過去にはなかった収拾のつかない破局的な大事件・大事変に見舞われ、世界秩序も社会倫理も大混乱し、とくに2つの世界大戦による戦禍は大量の死と文化の破壊をもたらし世界を終末に導いたといえそうであり、多くの人びとは信じていた世界の秩序や社会倫理が失われ、信じられる確かなものがなくなっていき、まさに「神は死んだ」、「マルクスも死んだ」ため、世界の断末魔的・終末的状况から人類をだれも救済できないという事態の連続でもあったから、人びとはその世界的事変が勃発するなかで希望を奪われ、そこに巻きこまれる死に直面する絶望こそが人生の本質に置かれるべきとする考えや思想が一般化していくと、人びとのなかには自暴自棄的気分をもつようになり、体制を否定し権威を罵倒したり、「従来の最高の価値がその価値を喪失」し、規範的価値体系を無意味化されているというニヒリズムの風潮がじつに多勢の人の心を捉えるようになっていたので、梅本克己氏がニヒリズムが到来するというニーチェの予言は的中したような現実が出現したといえることができるといえそうではある。

しかし、第1次世界大戦にはじまる20世紀における大事件の総体を一括してニヒリズム現象ということはできそうであるが、それらの一つ一つをとりあげてどのような意味でニヒリズムといえるかを問うてみるならば、いずれも明確な回答は出ないであろう。こうした事情は、やはり「20世紀が、19世紀風の大思想体系の崩壊過程である」とされて、20世紀の諸思想を検討した1966年刊行の清水幾太郎氏の『現代思想』においては、ニーチェのニヒリズム到来の予言はヒトラーのナチズムの出現に限定し

て論究されているのを見ることができる。

さきにもみたが清水幾太郎氏は、19世紀の西ヨーロッパの経済・政治・社会の安定性・確実性をさらに確固たるものにする科学・学問体系の発展や、高水準で円熟した芸術の隆盛などが、20世紀の声を聞くとその現実が動揺して不安定になり、それを支えていた理念が崩壊しはじめたことを指摘されながら（：「神は死んだ」だけでなく「神々は死んだ」とマルクスを含められている）、とくに第1次世界大戦に敗北した後のドイツは敗戦という打撃だけでなく、戦後20年間にわたって経済が超インフレーションから超デフレーションとが相次いで襲いかかりつづけて、大多数の国民生活を極度の貧困・窮乏に陥れ、この長期間の経済的破局・不安定が国民を絶望の極みに生きていたため、国会選挙に際してもっとも景気の良いことをいうヒトラーに破れかぶれの思いで投票して、ナチス政権を成立させてしまい、その後堰を切ったように、自ら武器を手にして全ヨーロッパの国々に戦争をしかけて征服をし、19世紀には幸せだったすべての諸国民を不幸・悲惨のどん底にたたき落とし、まさに「ヨハネの黙示録」のハルマゲドンを実際にこの世に実現したのだから、終末に神の再臨がないニーチェのニヒリズムの論理どおりの現実がほんとうに出現したといえることができるであろう。(つけ加えておけば、ニーチェが恐ろしがっていた恐慌を、アウトバーンをつくって克服・解決した史上初の政府はヒトラー政権だったのである。)

さらに、ハルマゲドンがこの世に実現させたナチス・ヒトラー政権は無思想であったから、清水幾太郎氏は政治的ニヒリズムであるといわれるのであるが、その事情はすでに1939年にヘルマン・ラウシュニングが『ニヒリズムの革命』においてナチの無思想をニヒリズムと呼ん

だことに端を発しているとされ、のちに「スイスのデュレンマットの『政治の崩壊と再建（1951年）』が、ナチのニヒリズムについて詳しく述べている。『思想の歴史10』・1966」といわれているが、ヒトラーがニーチェの超人思想を暴力支配の根拠に使っていた（神の死により最高・絶対の価値基準が喪失し、人の行為を規制する道徳も無力になるニヒリズムが支配しているので、神に代る超人の思想に基づいて、周辺諸国から第1次大戦の賠償をとられ、圧迫をされつづけ、経済の破綻もつづく状況を脱するため条約を破ってハルマゲドンである戦争をすることは正当だともなるだろうか）というから、無思想のナチズムが政治的ニヒリズムということができるかもしれないものの、思想以外の現実のニヒリズムはこの1930年代のドイツの侵略戦争を中核においた政治に典型的に表れていたといつてよいであろう。

ただ、清水幾太郎氏が「1930年代は特別な時期である。それが特別な時期であることは、1929年の大恐慌から第2次世界大戦の勃発にいたる10年間の諸事件——満州事変、ニューディール、ヒトラーの政権獲得、フランスの人民戦線、スペイン内乱、独ソ不可侵条約などを——を思い出してみれば、だいたい、明らかになるであろう。1930年代が特別な時期になったのは20世紀初頭の天才が予言し宣言したニヒリズムがこの10年間に実現したからである。」ともいわれているが、先にもみたようにこれらの20世紀の大事件を、さまざまな理論的立場、見解の相違があるとしても、一括してニヒリズムというのは無理があるといつてもよいであろう。

清水幾太郎氏はそこで「日本に関する限り、ニーチェの謂わゆるニヒリズムの時代は、漸く始ったばかりである。」といわれていたのは、

1966年当時の神々の一人「マルクスは死んだ」という日本固有の事情があった。〈神という絶対者、なんともできない最高基準などという權威を理解できない日本人にとっては、「神の死」という恐しさもわからないので、じつはニヒリズムもわからないといえよう。〉つけ加えるなら、20世紀の終り1991年旧ソ連共産主義体制が崩壊し、つづいて世界中の共産主義体制なるものが変質し、崩壊してみると、20世紀のどこにもマルクスが目指した共産主義はなかったことがわかってみると、共産主義・マルクス主義の全面的な価値崩壊が起ったということになるので、「神々は死んで」いたことになるので、20世紀は全面的にニヒリズムの時代だったのだということになるのかも知れない。

ところが、20世紀も終りに近い1991年に旧ソ連共産主義体制は崩壊するのであるがその直前の1988年にブレジンスキーは全般的危機に瀕するソ連共産主義体制を『大いなる失敗』と題する著作で詳細な分析している。そこで驚くべき考察をしているので、長くなるが引用すると、「共産主義が20世紀の歴史にこれほど大きな位置を占めてきたのは教義の『極度の単純化』が時代に合っていたからだといえよう。あらゆる悪の根源が私有財産制度にあるとした共産主義は、財産を共有することで真に公正な社会が、したがって人間性の完成が達成できると仮定した。……偉大な宗教の魅力に似ている。……マルクス主義思想は、知識人たちに人間の歴史を理解するための鍵を、社会や政治の変動を評価する尺度を、経済行動の知的な解釈を、さらに社会参加の動機づけを与えたのである。特に『歴史的弁証法』は、現実の矛盾に立ち向かう有力な武器であるかのように見えた。同時に理性に基づいた行動を渴望していたインテリにとって、贖罪のための『革命』を推進する政

治活動や、合理的な計画によって公正な社会を実現しようとする国家統制は魅力的であった。……20世紀はこうして国家の世紀になった。これは予期せぬ展開であった。実際、ユダヤ系ドイツ亡命者の一図書館員（：マルクス）が練りあげ、20世紀への転換期に、無名の一ロシア人政治扇動者（：レーニン）が熱狂的に信奉したこの理論が、今世紀を動かすドクトリンになるうとは誰一人予見しなかった。……20世紀における政治勢力としての共産主義の出現は、ファシズムとナチズムの台頭に切り離して考えられない。実際、共産主義とファシズム、ナチズムは歴史的に関連があり、政治的にも類似している。いずれも、工業化時代の深刻な問題——何百万という根無し草のような労働者の出現、初期資産主義がもたらす不公平、そこから生じた階級対立など——への答えとして生まれたものである。……こうした状況の下で、社会的憎しみを社会正義という理念で包み、社会を救済する手段として国家の組織された暴力を正当化するにいたるのである。ヒトラーのナチス・ドイツとスターリンのソビエト・ロシアは、のちに大規模な戦争を展開するが、これが共通の信念を持つ者同士の兄弟殺しの戦争であったことを、多くの人は忘れている。……ヒトラーがレーニンやムッソリーニの政策を熱心に研究したことをつけ加えておこう。……哲学的にはレーニンもヒトラーも巨大な規模の社会工学の必要性を唱えたイデオロギーの提唱者である。かれらは真理の決定権者を僭称し、社会をイデオロギーに基づく道徳観——一方は階級闘争、他方は人種至上主義——に隷属させた。……スターリンがナチであったと同様、ヒトラーはレーニン主義者であったといっても過言ではない。」と屢々論述しているのに接すると、20世紀はニーチェのニヒリズムがナチズ

ムを生んでいくのと平行して、マルクス主義がスターリン主義なるナチズムと同質のものを生んでいたというじつに恐しい時代だったのである。

ニーチェのニヒリズムと20世紀の世界の現実

そうとすれば、梅本克己氏がニヒリズム到来の予言的中させたといわれているニーチェが、地上の恐慌を天上の神の死として捉え返し、「あらゆる信仰、信だと思ふあらゆる働きはみな、必然的に偽であるということ。なぜなら真の世界など全く存在しない」と、神の死と恐慌によりあたかも世界のすべての存在の価値の全面的な剥奪の極限のニヒリズムを論理的に提起しているのは、現実でも20世紀には幾多の政治的・経済的・社会的危機や、とくに2度の世界大戦など世界的大混乱が起きていたので、それをニヒリズムという価値剥奪の論理は抽象的ではあるものの時代全般の動向・風潮を鋭く洞察するものではあることは確かであり、現実の一部の領域や、学問・思想あるいは芸術のある特定の領域においては価値喪失という論理が深くかかわりをもつ優れた概念であり、そのニヒリズム現象は20世紀の世界的危機の混乱として実際に現出したともいえるかもしれないが、ただしこの論理だけでは19世紀から20世紀にかけて現実を危機に陥れ、神を死なせ、社会を混乱させる原動力となっていた恐慌そのものに対する解明はなされていないことはみたとおりである。

恐慌を19世紀においてもっとも正確に論理的な把握し、解明していたのはマルクスただ一人しかいなかったことを明記しておかなければならない。（通常、ニーチェの思想やニヒリズムの理論的継承者は無神論的実存哲学者のハイ

デガー〈適切な自覚をもつ自己と、その論理能力によって確実に根拠づけられて把握されたものの以外はどんな権威も、どんな合理的にも見えるものであろうと自己の認めないものは蓋然的存在として退け、自らの行為決定に際しては何にも頼らず、全面的自己責任をもって対応するという論理を中軸とする実存主義で、ニーチェのニヒリズムと超人思想が引き継いでいる。〉だということになっているが、梅本克己氏は「神の死を宣告したはずのニーチェの思想が、キリスト教神学の中にくみこまれてしまった……第1次世界大戦後のドイツに発生した危機神学〈弁証法神学〉の中では、いみじくもニーチェへの『真意』がくみとられてキリスト教神学の財産目録の中に組みこまれてしまった。」と、ニヒリズムがプロテスタント神学にも継承され、ともに20世紀に生きているといわれていることをつけ加えておき、後ほど検討していきたい。

マルクスの恐慌論と革命論

そこで視点を、梅本克己氏がニーチェは予見を的中させたのに対し、「マルクスの予測がはずれた……破局的な恐慌が生み出す社会情勢の中での労働者階級の運動によって、資本主義は崩壊するであろうという予測である。」と指摘されている方に向きをなおし、マルクスの理論の方をみるならば、その理論は明確な世界観を信念としてもつカトリック神学体系やヘーゲル思弁哲学体系、および清水幾太郎氏があげているコントの社会学体系などの三者以外にはない大規模な理論体系で、世界のあらゆる事象の本質が一貫した論理によって掌握されているだけでなく、その理論に即して実際に変革の対象にもしている現実の資本主義においては強者とし

ての階級的支配者である資本家が被支配者である弱者としての労働者を搾取している行為・活動が、資本主義の最大の悪を生む矛盾・欠陥とする論理的軸にし、搾取が経済格差、非人間的疎外労働、窮乏化される悲惨な生活などを生んでいく経済・政治・社会の構造を、否定的に解明する理論体系は資本主義の悪を追求する高度で膨大で詳細をきわめ、その変革につづいて構築しなければならない将来社会をも貫徹して支える理念も正義と自由・平等が厳粛に展開されていて、観念の領域で勝手に作られる妄想的論理の成立には余地を寸分も与えない緻密・厳格な論理によって構成されていたのであった。

この厳密・大規模な人間解放を求める思想・理論体系の一環としてマルクスは19世紀ではただ一人、恐慌を西ヨーロッパに確立し発展する資本主義体制の根本的矛盾を原因として発現する経済的危機であるとともに資本主義を崩壊させる体制総体の危機であることを社会科学的に理論づけられているのであり、さきには1848年の『共産党宣言』の論理をみたが、改めて1859年の『経済学批判』におけるその論理をみるならば、「社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階に達すると、いままでそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと一変する。このとき社会革命がはじまるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。このような諸変革を考察する際には、経済的生産諸関係に起こった物質的な、自然科学的な正確さで確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それと決戦する場となる法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、つづめていえばイデ

オロギーの諸形態とをつねに区別しなければならぬ。……この意識を、物質的生活の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならぬのである。」と明確な論理化をしていたのであり、恐慌の本質を資本主義経済体制における生産力と生産関係との根本的矛盾として発現するという的確な解明をして、それを世界ではじめて論理化するとともに、つづけて恐慌という資本主義の根本矛盾の発現が搾取関係でもある階級体制・経済構造とその上部構造〈政治・法律・道徳・宗教・芸術等〉を革命し体制変革させると、革命を恐慌に関係づけた論理を創っていたのであった。

ところで、梅本克己氏がマルクスは20世紀への理論的予測を外したといわれた際に引用したマルクスの文に即してみると、生産諸力の発展を既成の生産諸関係が受け入れ不可能になって恐慌が発現するという論理こそ19世紀には誰も解明できなかった資本主義市場に起こる生産と消費の不均衡、もしくは供給と需要の不均衡という現象の指摘であったうえ、この論理はいまだに通用する正確な規定であったから、予測を外したと指摘されている事象は恐慌そのもの論理的規定ではなく、マルクスの理論的失敗は恐慌に連動してイデオロギーをもった運動が起こって社会革命がはじまり、しかもその変革は全上部構造まで巻きこんで、恐慌が階級闘争を激化させて体制の崩壊にいたるといった論理的予測が20世紀には実現しなかったということにあったといえようが、いまになってみるとマルクスの体制崩壊・変革の予測は梅本克己氏の否定的評価をはるかに超えて、マルクスの革命論を信奉したマルクス主義者を名乗るグループが、当該国で革命なるものを起こし政権奪取してその後創った体制・社会は、マルクスの

掲げ主張していた他のいかなる思想より遠大な、神の国をこの地上に実現させようとするような高邁な理念に裏付けられた新しい国創りを目指したはずであるにもかかわらず、その理念とはまったく異なる、正反対のあまりにも醜悪な時代遅れの地獄というのがふさわしいような体制・社会を各地に創ってきたであり、20世紀のマルクス主義者たちの革命運動ほどマルクスとマルクスの理論、および活動家、諸国民などを裏切りつづけてきたものはなかったのである。

19世紀のニヒリズムは恐慌が、20世紀のニヒリズムは革命の失敗が生んだ

いま引用したマルクスの『経済学批判』においては、資本主義社会の根本的矛盾の顕現的現象として周期的な恐慌の循環的発生により崩壊して社会革命が起き新しい社会が創られていくという論理的予測をしていたのに対し、その前に引用して検討したニーチェの『力への意志』の冒頭の文を再度覗いてみると、ここでは隠喩的な理論を使って周期的に循環する同じ恐慌によって、神は死んで最高の価値基準が無意味化するニヒリズムが到来するという論理的な予言をしているのであるが、両者ともに同じ19世紀の西ヨーロッパの現実を具体的にみるか、抽象的次元においてみるかは別にして、ともに分析の対象にして、そこに周期的に発生する恐慌の解明をしているのであるが、マルクスが現実には科学的に正確に恐慌の本質をとらえているにもかかわらず予測の方を外し、ニーチェは観念のなかでその深刻性を表現しているだけであるにもかかわらず、20世紀には無思想で領土拡大侵略戦争というハルマゲドンの招来しかなかったヒトラー・ナチス・ニヒリズム政

権が成立しただけでなく、社会主義・共産主義を名乗る体制が暗黒社会であったため、マルクスの理論を信奉していた人びと、活動家などの絶望をよび、その価値基準を完全に転倒させてしまったことをニヒリズムに加えるならば、ニヒリズム理論はマルクス主義を超えたともいえそうではあるものの、アンチ・クリストのニーチェはイエスが伝道のはじめに「悔い改め、身を慎め、神の国は近づいた」と宣言した言葉をひっくり返して、神の国とは完全に反対のニヒリズムが近づいたと到来の予言をただけであったからの中しているようにみえるのに対し、キリスト教の正統な継承者であるマルクスは「神の国」を共産主義社会におきかえて、資本主義社会の弱者である労働者階級が強者である資本家階級を打倒する革命を実現して、弱小貧者が苦難・貧困・自己疎外から解放され、すべての人びとが自由で平等で豊かな生活ができる理想的な神の国・千年王国を、キリスト教を超えて地上に共産主義社会としていかに構築していくべきかという倫理的活動までも詳細に論究しすぎたために、理論的な大失敗をする面もあったということなのである。

このように抽象的論議をくりかえしてみると、一見平和のなかで豊かさを増大させて成熟をつづけていた19世紀西ヨーロッパ先進資本主義諸国を襲った現実の恐慌現象を、マルクスとニーチェだけは世界の安定を打ち破る事象と掌握したのであるが、キリスト教の文化が主流の社会では現実の危機は終末論として捉えられるらしく、マルクスは恐慌の後に共産主義が、ニーチェは神を殺したうえでニヒリズムは終末と同時に神の国・千年王国が到来するという論理と類似の、あるいは裏返した暗闇の未来社会が展望させていたので現実離れをして予見に失敗を呼んでいたといえよう。

そこで思想的な抽象的論議から少々横道にそれることになるが、ニーチェのニヒリズムはもちろんのことマルクスでさえ共産主義社会が到来すればすべての人びとは救済されるという前提があるらしく、恐慌が生む大量の失業や貧困を実際にどう救済するかという社会政策・社会福祉のような現実社会での救済をどう担うかという理論は、まだつくられていなかったため、恐慌こそ集中的にニード・社会問題を発生させる経済的破局現象なので、その結果がニヒリズムや共産主義などを到来させるといった抽象的問題から論議を引いて、具体的に恐慌が生む被害である失業・貧困あるいは倒産などの社会問題がどうして発生するかというメカニズムの考察を超えて、視点を少し現実の方に移して、恐慌に被害を受けて社会的諸施策を決定的に必要とさせる実情についての考察を加えておきたい。

マルクス本来の恐慌・革命論は対策としての社会政策を生まなかった

もともと日本の社会政策・社会福祉などの政策理論のあり方は、第2次世界大戦前からの欧米から移入された社会科学理論は理論自身の論理性と日本の実際の政策・現実性とは別次元のものとし、日本の古い現実には現実、現実の変革を求める理論は理論と、まったく次元が別だとしている日本の事情のなかにあったから、日本の現実とはかかわりなく世界での社会の発展段階が史的に位置づけられ、それを革命で進展させられるという規範的理論性の強いマルクス主義理論に依拠することが日本では最適だったため、自らの政策が救済・解決を担当すべき対象は資本主義の経済構造の矛盾・欠陥が生む貧困・失業などを革命の原因にもなる社会問題と

いう捉え方になっているので、実際マルクス主義者が目指す共産主義革命はその高邁な意図とは異なり、現存の封建的社会主义体制に逆行させるような理論は日本の現実はそのうちの、マルクスの理論の字句だけをめぐって不毛な論争がくりかえされ、運動の方も日本の現実をそのうちの自己の正統性のみを主張して分裂をくりかえし、後年左翼勢力同士が内ゲバなるものを起こして、いまはマルクス理論・左翼運動総衰退というニヒリズムを到来させてしまうということになり、このような論理的考察からすればマルクス主義理論に依拠してつくられてきた日本の社会政策・社会福祉の理論は意味をもたなくなってしまう、現実的有效性も失うという論議になる。

つまり、マルクスの理論に即していえば、生産諸力と生産関係の矛盾が恐慌を発生させ、このとき社会革命がはじまるというのであるが、このことから恐慌が生む貧困・失業などは革命の原因であり、それは社会問題なのでそれらが革命につながらないように国家が介入せざるをえなくなり、その対策が社会政策だということになっているのである。(この問題は後述する。)

ただし、社会的政策系の理論のすべてがマルクス主義ではないので、社会政策・社会保障・社会福祉などの国民の生存権保障し、個別的ニードの救済・支援をする政策は、国防・治安・消防を別格として国民の生活を保障するインフラストラクチャー（：社会資本）を整備をする政府の経済活動の一部であるとする政策理論の立場に立つと、恐慌は政府の経済活動のための財源である税収は減少し、政策が解決すべき失業・貧困が急増することは確かなので、恐慌が神を殺しニヒリズムを到来させるとか、資本主義を崩壊させて共産主義社会を出現させるといふ予言・予測を検討することより、恐慌そのもの

の本質を正確に理論的な把握をしておかなければならないであろう。(このような、財政学・公共経済学を基礎において、政府の財源配分を厚生経済学の論理で決定づけ、所得再分配政策である社会政策の位置づけ、その質・量を決定させる理論は後に詳述したい。)

マルクスとニーチェの恐慌論の現代的意義

さて、19世紀から遠く隔たった2008年秋、アメリカの金融機関の倒産をきっかけに金融危機なるものが惹き起され、それが震源となって世界中の経済が破局に追い込まれて、1929年の大恐慌に匹敵する経済的に危険な事態が起きたのであるが、その規模こそ大きく異なるものの端的にいうと恐慌発生メカニズムは1825年にイギリスではじめて発生したときも、2008年の100年に一度と形容される経済危機も、資本主義体制の構造的欠陥が生み出した経済的破局だという点では全く同じまなものであったところに、資本主義固有の不治の病であることがみえてくるのである。

19世紀の世界の工場・パクスブリタニカの覇権大国・世界一の超経済大国のイギリスにおいてははじまる経済恐慌が、同様の形態のままいまだに周期的に循環しているということに、ニーチェの永劫回帰のような苦難・苦痛が人の身や社会に繰り返し襲ってくるような脅威をおぼえるほどであるが、19世紀はもちろん現在にいたるまでその本質を正確に把握し理論化していたのはマルクスだけであったと、不破哲三氏はマルクスの理論を体制変革の理論に復活させることを求めて著わされた『マルクスは生きている(2009)』でいわれている。不破哲三氏によると、マルクスは『資本論(1867)』の第3部で「すべての現実の恐慌の究極の根拠は、

依然としてつねに、一方では大衆の貧困，他方では生産諸力を，あたかも社会の絶対的消費能力がその限界をなしているかのよう発展させようとする，資本主義的生産様式の衝動なのである。」と、現在でいう「生産と消費の不均衡」，「過剰生産恐慌」といわれている論理を簡潔に，しかも実証的論理として述べていることを紹介されながら，「マルクスは，資本主義的生産のこの矛盾を、『商品の買い手』としての労働者に対する資本の態度と，『商品（労働力）の売り手』としての労働者に対する資本の態度の違いが引き起こす必然的な自己矛盾として説明されていますが，これは，この矛盾の本質をめぐりにした説明だと思えます。」というコメントを付されているとおり，19世紀最高の明確な規定を恐慌に与えていたのであった。

もともとマルクスの理論は資本主義という階級社会は表面的にはすべての国民が自由であり，そのうえ通常の資本主義国家は民主主義体制をとっているので平等でさえあるようにみえるにもかかわらず，なぜこの経済体制には格差や不正，あるいは倫理的退廃が横行するのかということについて、『資本論』では日常的に無数に流通している商品の価値を分析することをおして，資本家が労働者を搾取して剰余労働・剰余価値を合法的に詐取することが諸悪の根源であることをつきとめるという画期的な理論をつくっていたのであったが，この論理によれば階級社会では剰余価値をより増大させようとする資本家は生産のさらに拡大を図り搾取を強化させるため，労働者はますます窮乏化させられて購買力を失う結果になるので急激に供給される商品を購入・消費ができず社会に大量の商品が売れ残ってしまう現象が恐慌であるという説明されることになる。

ということは19世紀においてはマルクスの

『資本論』だけが，キリスト教慈善に源流をもつ社会政策・社会福祉などの救済施策およびその理論が解決・援助の対象とする貧困・失業などの社会問題・ニードが，いかなる状況・事情の下で発生するかという理由を社会科学的・経済学的に解明していたのであったということができるのである。このようにマルクスが剰余価値と恐慌を適切に理論化されていたことは，不破哲三氏がいわれるように悪の体制である「資本主義の秘密」を剰余労働の存在を指摘することによって暴露し，恐慌の解明は資本主義がその体内に「死に至る病」を抱えていることを論理化したことはいまだに真理性をもっていると高い評価を与えているが，19世紀の段階では搾取の解消も恐慌の回避も共産主義革命によるしかないと考えられていたのであった。

だから，不破哲三氏はマルクスがすでに1848年『共産党宣言』を発表した時点で，1825年，37～38年，47年のたった3回だけの，しかもイギリスだけの恐慌しかみていないにもかかわらず，当時のいかなる理論家よりも正確な天才的な理論的把握をしていたとして，「社会がもっている生産諸力は，ブルジョアの文明とブルジョア的所有諸関係を発展させるにはもはや役立たない。逆に，生産諸力はこの所有諸関係にとって巨大になりすぎ，この所有諸関係は生産諸力にとって障害となる。そして生産諸力がこの障害に打ち勝つとき，それはブルジョア社会全体を混乱におとし入れ，ブルジョア的所有の存立をあやうくする。ブルジョアの諸関係は，自分がつくりだした富を入れるには，狭くなりすぎたのである。」という引用をされているのであるが，マルクスはこの時期からはやくも資本主義体制における生産力と生産関係（所有関係）の矛盾が恐慌を発生させる原因であることを突きとめ，その恐慌がブルジョア支

配体制を崩壊させることを示唆していたのであり、ここに先にみたような剰余価値論が加わればマルクス理論の基本線のひとつは確立していたといえるのであった。さらにまた、不破哲三氏の助けをお借りすると、資本主義と経済学の本家であるイギリスでも、偉大な経済学者「リカード」の後継者たちは、恐慌の目撃者になりましたが、その解明に正面からとりくもうとはせず、逃げ口上に終始しました。経済学者のなかには、恐慌のうちに資本主義経済の深刻な危機を見てとったもの（シスモンディなど）も少数ながらもいましたが、資本主義を歴史の一段階とみる歴史観をもたなかったために、脱出路を見出せない、悲観主義に落ちこむだけでした。この問題でも、『科学の目』の威力を發揮したのは、マルクスでした。」といわれている。

マルクスの恐慌論は正確・革命論は失敗

19世紀西ヨーロッパはパクスブリタニカのもと平和と安定が支配する世界と考える思想や風潮の方が主流であったから、マルクスのように（あるいはニーチェのように：悲観論に区分けされるであろうか）10年毎に起きる恐慌をとりあげて、ことさらに安定した幸せな世界・社会を崩壊させる魔の襲来だと考える理論家は稀有な存在、しかもマルクスは共産主義者であることを標榜してこの安定社会は資本家階級の支配する資本主義社会だと規定して、その社会・政治・経済・文化の総体を悪しざまにののしり、その不正・悪の本質を鋭く批判する危険人物だったので、大陸から追放されロンドンで亡命生活をおくりつつ、母国で身につけた哲学とイギリス経済学を継承・止揚する独自の経済学『資本論』を著わして、資本主義の不正義・悪の経済構造を徹底的に究明していたのであり、

マルクスだけが恐慌の本質を理論的な把握をしていたのは新しい経済学が創られていたからであった。

ただ、マルクスの理論は経済学だけでなく哲学および共産主義思想が統合されている（三位一体のような）体系を創っていたので、他の経済学のように資本主義市場の経済構造を解明して、その本質を理論的に展開・提示すれば理論的営為が終わるとするような単なる実証的理論ではなく、資本主義の経済構造は剰余価値を生むという真実を発見し、資本主義の経済体制は支配者の資本家階級には有利に働いて富を容易に獲得させ、被支配者・弱小貧者の労働者階級には不利益を与えるように働いてその生活を窮乏化させるという解明をしていたのであるが、このように資本主義の経済は分配に貧富の格差を生み出す不公正な機構だという認識に到達したからには、資本主義の経済構造を廃棄し社会体制を変革しなければならないという共産主義的規範的理論が連結し重層化されているので、搾取され不利益を受けている労働者階級は資本主義社会を打倒し共産主義社会を創るための社会革命のために決起せよという倫理的指令が出されるという理論的二段階構造をもって、現実世界の社会科学的把握と、それを基礎において人はいかに生きるべきかという倫理的提起まで展開する総合的理論体系を創っていたのである。

マルクス経済学における恐慌と革命の関係

ところで、19世紀の「神は死んだ」と、20世紀は暗黒のニヒリズムの混乱のなかになげこまれて、まっとうな思想家は20世紀前半は戦乱のなかで、後半は冷い戦争のなかで苦吟・苦闘していたのであるが、独自の社会思想

体系、あるいは社会や国民を倫理的に規制する統一的な独自の宗教をもたず、移入理論しかもたない社会思想・社会倫理後進国の日本の理論界・理論家たちは、神の死・ニヒリズムにさほど苦しむこともず、マルクス主義理論を第2の神にみだてて、真理・正義・善の権化・希望の光・生の支えなど、かつての神に代る絶対的地位を与えて、全世界を解釈をし、社会主義・共産主義という神の国への革命に誘っていたのであったが、20世紀の終りとともに共産主義体制・千年王国は消滅し、第2の神・マルクスも不在になってしまい、いま、いま日本も真のニヒリズムの闇のなかに沈没し、誰も将来への普遍的指針を提起できないでいる。

このような、みる視点によればニヒリズムのどん底にいる日本の状況のなかで、いまごろなぜマルクス主義理論の検討をするのかといえ、神の国・共産主義を目指すとしながらスターリン体制や毛沢東体制という地獄の体制をつくってしまったかについての反省をふくめて、何故にマルクス主義を全知全能の神のように信じてしまったかについての、検討をしなければならないからである。

いままで、みてきたことをつづきでいくと経済学と革命の関係をみるとすると、マルクスの『資本論』のなかで、資本の運動が資本家に富を労働者に貧困を蓄積させた果てに資本主義が崩壊するという、非常に珍しい論述があるのでそこを覗いてみると、資本家になるためには「頭のとっぺんからつま先まで毛穴という毛穴から血と汗と汚物を吐き出しながら」悪の限りを尽くして貨幣を集めて、〈本源的蓄積という〉それを不変資本と可変資本（生産設備と労働賃金）として投資することからはじめ、可変資本として購入した労働力を搾取し、その結果得られた剰余価値を資本に再転化して資本の蓄

積過程をくりかえすことにより、「社会的富、機能する資本、その増加の範囲と勢力、したがってまたプロレタリアートの絶対的な大きさとその労働の生産力、これらのものが大きくなればなるほど、産業予備軍も大きくなる。……この予備軍が現役労働者に比べて大きくなればなるほど、固定した過剰人口がますます大量になり、その貧困はその労働苦に反比例する。（『資本論』以下同）」と、資本主義という体制は一方に資本と富の蓄積が、もう一方に貧困と労働苦の蓄積がされるという、対立する人びとの間に正と負とでもいうべき相反するものがそれぞれに大きくなりながら蓄積されることを通して発展するとして、「資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、生活が窮乏化され受け取る支払いがどうあろうと、高かろうと低かろうと、悪化せざるを得ないということになる。……それは、資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必然的にする。だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである。」と、対比的な蓄積論をして、このような資本主義的蓄積の過程こそ資本による搾取・収奪が強化・確立される過程であるから、逆に資本主義の崩壊過程でもあるという解明をして、「この収奪は、資本主義的生産そのものの内在的諸法則的作用によって、諸資本の集中によって行われる。いつでも一人の資本家が多く資本家を打ち倒す。……この転化過程のいっさいの利益を横領し独占する大資本家の数が絶えず減少するにつれて、貧困、抑圧隷属、墮落、搾取はますます増大するが、しかしまた、絶えず膨張しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大する。資

本独占は、それとともに開花しそのもとの開花したこの生産様式の桎梏になる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらが自分の資本主義的な外皮とは調和しえなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」と、資本主義の崩壊をダイナミックに叙述しているなかに、マルクスの考えていることが凝縮されているように見える。

このように『資本論』のなかで「資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」と、文学的表現でありながらも革命らしき事柄について語った唯一のこの個所の論理を少し敷衍すると、まえにもみたが、マルクスの革命論は新約聖書の神の国の教義と重なっている。いままでみてきた恐慌は生産手段の所有関係における搾取をととして資本家階級には富の蓄積が、労働者階級には貧困の蓄積が対極的に増大するという根本矛盾が限界に達したときに起きる経済的破綻を指すということができよう。マルクスは恐慌の周期的循環性については直接触れていないが、資本家と労働者という対立する二極にそれぞれ富と貧困の蓄積が急速に増大して不均衡を起こしては経済的危機・社会的混乱をくりかえしながら経済的成長をすという、つまり資本主義の敵対的矛盾の激化が止揚されながら進展していくとする論理で捉え、その過程で利益を横領し独占していく一握りの資本家のために大部分の国民・労働者は物質的苦難と精神的苦痛を押しつけられつづける被害・犠牲によって発展するのが資本主義社会であるから、そこで自らと社会の富を生産しているにもかかわらず、富は資本家に横取りされ、搾取・収奪され虐げられた労働者階級はようやく自らを不遇な状態に陥れる悪は私有財産制であることを階級的に認識・自覚するようにな

り、弱小貧者を加害しつづける資本主義的私有に攻撃の矢を向けて従順さを脱皮して、労働者が最も被害を受ける恐慌をきっかけに私有制廃止に立ち上がり、いままでの収奪者を収奪する革命をすとしていたのであり、じつにさまざまな矛盾が錯綜する資本主義が（かつて毛沢東が『矛盾論』を著わし、世界情勢の分析・把握や社会の倫理の決定においてもそこに内在する主要矛盾・次要矛盾〈副次矛盾〉など質的区分をしながら矛盾止揚の動的な認識を基礎に置かなければならぬとする理論を提起し大きな反響を呼んだことがある）成長・発展や停滞・破綻をくりかえしながら基本的に拡大していく過程の一契機として捉えられているのである。

恐慌は革命の契機となりうるか

不破哲三氏の指摘で引用した、『共産党宣言』の恐慌論も、その前に引用した『経済学批判』における恐慌論も、端的にいうとマルクスは生産力と生産関係の矛盾が恐慌を起こし、さらにその恐慌が経済構造・土台を変質させて資本主義体制が崩壊に向かい、終局は革命にまでつながっていくとしていたのであったが、理路は上述の資本論の論理と同じとみてよいであろう。その際特徴的なことはマルクスは社会・体制のなかを二つの相対立する勢力によって構成されているものとして捉え、そのうち一方は強者で支配者としての資本家階級であり、もう一方は多数派の弱小貧者で被支配者である労働者階級の二勢力であり、その関係は強者・支配者資本家は弱者・労働者を徹底的に搾取・抑圧・収奪・支配をして利益・富を横領するという資本主義的悪行をくりかえしてますます富んでいくのに対し、その合法的犯罪のために虐げられた弱者

は「貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的退廃」などの状況を押し付けられるという社会科学的分析をしたあと、マルクスは当然弱小貧者の味方をして支持する側に立ち、強者・支配者・資本家階級を悪者として全理論を駆使して批判・糾弾して、その存在さえ抹殺しようという理論的主張をし、悪徳強者を打倒して生産手段を共同所有し、強弱・貧富の格差のない平等で自由で豊かな共産主義社会を革命によって到来させようという目標の結語がなされているのであった。

この論理構造は悪の強者が善の弱者を苦しめて栄えるが、やがて神の国・共産主義社会で懲罰を受けるというキリスト教の論理と同じであるということは前にも述べたが、ヨーロッパのキリスト教文化の下に育ったマルクスにあっては（小室直樹氏は『宗教原論』においてマルクスの理論はユダヤ教の教義から予言者や革命、賤民の救済など主要な論理は踏襲しているといわれている）反キリスト教主義者・共産主義者といわれながらも、前にみたように経済的破局に際しては終末の到来と捉え、終末とはキリストの再臨によって新しい世界に転換し、最後の審判になるので一人一人を個別的に援助・支援する救済政策の提起は後回しにされ、神の国・千年王国としての共産主義社会を出現させて一挙に全員を救済するという革命論を提起していたのであった。

このようにみえてくると、ニーチェの反・神の国として到来するニヒリズムも、マルクスの神の国・千年王国として革命によって招来させる共産主義社会も、ほとんど内容が説明されていないのは新約聖書におけるイエスが神の国について直接何も語っていないのに神の国にかかわる倫理・生き方を教えていることに倣っていたからであろう。つまり、イエスは「悔い改めよ、

神の国が近づいた」という発言から宣教を始めたように、未来の社会の設計図を描くのではなく、いまの生き方を未来から正す倫理の鏡だったのであることは、西ヨーロッパキリスト教社会で生きる者には常識だったのであるから、ニヒリズムも共産主義も現在の生き方の規定する倫理なのであった。だから、共産主義社会を到来させるという主張は、20世紀になって実現した革命が一度として真の理想的共産主義社会をつくることができなかつたどころか、マルクス主義者を名の勢力が中世以前に逆戻りしたような共産党独裁国家を創ったことはマルクスの責任ではまったくないということができよう。

非常に杜撰な考察になるが、イエスが説いた神の国の倫理は生きていて世界中の非常に大勢のクリスチャンがその倫理に従っているのであるが、神の国自身はまだ現実に現われていないように、共産主義社会をつくらうという革命の論理は今の生き方を拘束する倫理としての機能という面の方が強かったということができよう。確かにマルクスの理論体系は膨大であるため、ニーチェのように恐慌が発生したため神は死んでニヒリズムが到来するといった現実を離れた抽象的で単純なものではなく（もちろんニーチェの理論はこれだけのものではないことはみてきたとおりであるが）、厳密な社会科学によって理論つけられた唯物史観・経済学・共産主義がキリスト教の三位一体のようにそれぞれに具体的な現実の諸側面を把握しつつ弁証法的に統一され、総合的に非人間的な資本主義の矛盾・限界を暴きつつ、そこに虐げられ疎外されている弱者としての労働者階級がその苦痛に耐えきれず蜂起して、強者・支配者・収奪者である資本家階級から政治権力を奪い、所有関係の変更をして無階級社会を創造するという資本主

義のすべてを完全に裏返す社会変革・革命を提唱する論理に貫かれている理論体系が構築されていたのであったが、この体系はのちにマルクスの理論を継承する理論家たち、いわゆるマルクス主義者がつくり上げたものであったから、現実を貫く法則・必然性なるものが実際とは離れていたとしても、これもまたマルクス自身の責任ではなかったのである。

くりかえすならば、19世紀のヨーロッパを10年周期で循環的に襲来した恐慌は、その度に現実の資本主義経済・社会に破滅的混乱をもたらしては経済的再編成をさせ、その破壊と再編のくりかえしをさせる波動の力は資本主義体制を震撼・動揺させていることにいち早く気付き、経済学の本場のイギリスの経済学者たちでさえ誰も触れていないにもかかわらず、恐慌を生産力と生産関係の矛盾の現われだとし、生産関係は搾取関係だという正確な認識に到達していたことは画期的な理論的把握だったのであるが、ただマルクスの失敗は資本主義を揺るがす恐慌はその周期的発生毎にその規模を大きくし、資本主義を崩壊させる主要な要因になっていくという論理を創ったことと、恐慌の防止と克服の理論がなく革命論を代替させていることにあり、この二つの理論的不備が20世紀になってマルクス主義者勢力が成功させた革命後社会が、共産党官僚独裁国家にしてしまったことを指摘しておかねばならない。いきなり神の国は出現することはないのであり、神の国に入国する条件をマルクス主義的に論理化する必要がある。

プロレタリア革命の失敗はケインズ理論への無知と修正主義を敵視・排除したことによる

確かに、恐慌は資本主義社会特有な現象と

して1825年に最先進資本主義国イギリスで理由・原因も解らないままにはじめて発生し、以後10年の周期で循環的に襲来しては経済に打撃を与え、社会を混乱させるものであり、ニーチェはその過程に神の死んでいく状況を見、自らも持続して拷問を受けているような苦痛を感じ、全存在の価値が否定されるニヒリズムの到来を予言するほどのものだったので、折から『資本論』を執筆していたマルクスが資本主義経済は資本家階級が労働者階級を搾取することによって窮乏化させ、自らは富を蓄積をして体制を発展させるという論理を創っている最中だったから、搾取という悪行が需要をなくして資本主義自体を崩壊の方向に向かわせ、やがてマルクスの追求する共産主義・社会主義社会に導く契機になるとみたのは当然だったのかもしれない。

旧ソ連が崩壊するまで、20世紀は戦争と革命の世紀といわれていたが、1917年にロシアにプロレタリア革命が起き、いわゆる共産主義社会がソ連という形で実現したといわれてきたにもかかわらず、マルクス主義者集団が政治権力を絶対君主ロマノフ・ツァー体制から奪取して創った革命後の現実には、スターリン体制とも呼ぶべき共産党が支配する独裁国家という共産主義の鬼っ子的体制で、ロシアや中国その他の国々ににそろいもそろって生まれてしまっていた事実が露呈したことは、マルクス主義は真理・正義で、完璧なことを現実に証明する体制だと、日本のアカディミズムだけでなく、世界のきわめて多くの人びとが自発的にせよ、強制的にせよ信じきっていた理論体系と現実体制の崩壊でもあったから、まさに巨大なニヒリズムを到来させたので、ニーチェの予言は二重に的中していたのであり、マルクスの理論の存在理由はなくなっていたのであった。

1989年、ベルリンの壁が崩壊させられ、ソ連では改革の旗手ゴルバチョフが体制の変革をはじめたとき、さきにもみたようにブレジンスキーが著わした『大いなる失敗』は、当時のソ連の体制の全般的危機について驚嘆させられる分析と論理に満ちていて、その考察の内容が類書を圧倒しているので、何度も引用させていただいたのであるが、その鋭く指摘されている論理をもう少し借用していただくと、「共産主義は理性の力を信じ、完全な社会を建設しようとした。高いモラルによって動かされる社会を作るために、人間へのもっとも大きな愛と、抑圧への怒りを結集したのである。それによって最高の頭脳、最良の理想主義的精神を持った人々の心をとらえた。にもかかわらず、共産主義は、今世紀はもちろん他の世紀にも類を見ないほどの、害悪を生んだのである。」といていたが、類推すればニーチェの倫理は弱者のルサンティマンは最高の道徳・倫理を生んだのに、「最高の頭脳・最良の理想主義的精神」は最悪の害悪を生むという逆説が成立するようにみえる。

このように、共産主義・マルクス主義という「理想の力を信じ、……高いモラルをもつ最高の頭脳、最良の理想的精神を持った人々」によって支えられ、20世紀にはプロレタリア革命を実現させた完璧な理論体系がなぜ「今世紀はもちろん他の世紀にも類を見ないほどの害悪を生んだ」のであろうか、という理由の一端はさきに引用したように、マルクス主義の名のもとにレーニンが主導して1917年に成功させたプロレタリア革命によって創られた体制は、15年後に出現するナチス・ヒトラーのモデルになるような、人民弾圧・独裁的恐怖・抑圧収奪の不自由で不平等な富と権力が偏在する社会だったのであり、ブレジンスキーはさらに「社会変革の試みにおいて、20世紀における人類

の共産主義との遭遇ほど無意味で大きな犠牲を引き起こしたものはなかった。」として、最近の共産圏からの資料でおおまかな推定ができるといい、「犠牲者の数は次のとおりである。

1. 権力獲得の過程での処刑／革命や内戦での戦死を除く、処刑による死者の数は、ソ連で少くとも100万人、中国で数百万人、東欧で数十万人、ベトナムで少くとも15万人と推定される。
2. 権力獲得後の政敵や反抗者の処刑／これらの殺戮は共産主義者が全国を制覇していった数年間にわたり行なわれた。おおまかな推測で、その数は1.であげたものと同程度と思われるが、ソ連と中国の合計は控えめに見ても500万人といわれる。
3. 実際の態度に関係なく、政敵になる可能性があると思われた階級に属する人々の根絶／元軍人、役人、貴族、地主、僧侶、資本家が典型的な例である。処刑されたり、強制労働収容所に送られ、そこで大多数の人々が死亡した。……最近のソ連、東欧、中国の発表から推測しても、300万人から500万人は下回らないものと思われる。
4. 自営農家の解体／ソ連のクラークと呼ばれた階級がその代表例である。クラークは処刑または収容所送りとなって消滅した。ソ連と中国において扶殺された自営農家の合計は、数百万人から1000万人近くで、ベトナムと北朝鮮が数十万人と思われるので、この種の死者は1000万人以上であろう。
5. 大量の強制移住による死亡／農業の集団化のためにこのような政策がとられ、その結果ソ連、東欧、中国で大規模な飢饉、伝染病その他の混乱が起きた。……犠牲者はソ連だけで700万人から1000万人と推定される。中国では2700万人にのぼるといふ……つまり、控えめに見ても合計3000万人という恐るべき数字になる。
6. 肅清によって処刑され、また収容所で死んだ共産党員／ソ連では権力闘争に敗れて肅清された共

産党員が数多くいる。1936年から38年の間でその数は100万人を下らない…東欧では何万人も…中国でも——とくに文化大革命の際——数百万人が同様の運命に遭った。7.長期間の監禁、強制労働による肉体的・心理的損傷/ソ連では1950年代半ばの大赦によって、数百万人の人々が刑期満了前に釈放された。なかには、非常に苛酷な状況のもとで20年も監禁された者がいた。…中国では文化大革命後の1970年代前半に行われた。8.弾圧された人々の家族が受けた迫害/ソ連では上述の1.から6.までの項目に当てはまる人々の家族も処刑の対象となった。迫害には処刑から投獄、強制移住、住宅・就職の際の差別まで、いろいろな段階があった。9.社会全体に広がる恐怖と孤独感/社会のすべての階層—労働者と貧農以外—が共産主義による強制的な社会改革の際に、党や政府機関からイデオロギー的な憎悪の対象にされた。/以上のような社会的な犠牲—少なくとも5000万人の死者を含む—を見ても、共産主義が史上最悪の、途方もなくむだな社会改革の試みであったことがわかる。/共産主義の大いなる失敗は、一言でいえば、社会の有能な人々を葬り、創造的な政治活動を抑圧したことにある。実際に達成できた経済成長に比べ、あまりに高い人的犠牲を払った。そして、国家の中央集権化が進みすぎたために、生産性もしだいに低下していった。共産党政権のメリットになるはずだった社会保障制度は、過度の官僚制度のために除々に質が低下していった。そしてドグマの支配は、社会の科学・芸術の発達を阻害した。」というとてもつまらない数学の前では言葉を失ってしまうが、田川健三氏が「ヨハネの黙示録」の前で述べられた感想を引用しておこう。「私はただただ慄然とせざるを得ない。」そして、ニーチェが今後の2世紀はニヒリズムの時代で

あるという予見もつけ加えておきたい。

経済的恐慌の循環的襲来によるだけでは資本主義は崩壊しなかった

ところで、2009年に不破哲三氏が著された『マルクスは生きている』において、「マルクスが、わずか2度の恐慌の観察と研究から、それが体制的な矛盾を集中的に表した資本主義の『死にいたる病』であることを見抜き、その法則性をここまで明らかにしたということは、本当に驚くべきことだと思います。」といわれ、つづけて「その後の歴史は、マルクスの診断の正確さを証明しました。恐慌は、1825年にはじめてイギリスを襲って以来、世界経済をたえまなく攪乱し、資本主義は、この180年あまりのあいだ、ついに恐慌の脅威から解放されることはありませんでした。資本主義を擁護する人びとは、この『病』をとりぞことうとして、あらゆる努力をつくしましたが、結局、恐慌を防止するどんな特効薬を見出すこともできなのです。」と述べられているが、確かに1825年に恐慌がはじまって以降約180年余り、1848年にマルクスが『共産党宣言』で恐慌を明確に規定して160余年、それ以後1929年にはとてもない大恐慌が襲って世界中の経済を破滅に追い込み、さらに恐慌克服の一方法でもある2度の世界大戦を経て、21世紀になってからまで100年に1度ともいわれた大金融危機が襲ってこれもまた世界の経済を破綻に追い込んでいるなど、資本主義にとりついた「死にいたる病」ともいえそうではあるが、ただ資本主義体制はまだ崩壊していないどころか、一旦プロレタリア革命や社会主義革命に成功して共産主義を自称する体制を創ったロシアと中国が、20世紀末に国家主導の中央集権計画経済を捨てて市場

経済体制を採択して資本主義的な経済運営に復帰したことにより経済成長をつづけているのを見ると、不破哲三氏のマルクスへの評価は少々甘いといってよいのであるが、ただ180余年におよぶたび重なる恐慌の「周期的な災害にたいして、資本主義が大規模に乗りだしたのは、世界を震撼させた1929年の大恐慌以後のことでした。このとき、イギリスの経済学者ケインズが、国家の介入で被害を緩和し、利潤第一主義に一定の規制をくわえる、という政策体系をうちだし、第2次世界大戦後、これが世界の資本主義諸国の指導理論となって、20世紀後半の資本主義経済の世界的な高成長の一時代をつくりだしました。」と一か所だけ真っ当な論議もされていることは、きわめてすぐれた論理的考察として、さらにケインズ理論の現実的有効性を承認したようにみえる論理として非常に注目すべき発言だったのである。

ただその直後にはマルクス主義らしく一転して「しかし、ケインズ路線も、恐慌対策としては、災害の規模や度合いをある程度緩和する効果をあげただけで、恐慌や大不況の周期的な到来を防ぎとめることはできず、国家財政に巨大な赤字をもたらして、1970年代の初頭には『経済学の危機』が叫ばれ、経済政策としても放棄されるにいたりました。」と、マルクスの再生のためケインズに死を与えているが、いままでみてきたように時代の趨勢としてマルクスの時代は終わっているのであり、再生させなければならぬのはケインズの方でなければならないのである。

さきほど、ブレジンスキーの論理を借り、20世紀においてマルクス主義勢力が実現させた革命は、当該国の国民を不自由、貧困、抑圧、恐怖、格差のどん底につき落とし、世界的にみると5000万人もの人びとが内部抗争によって殺

戮されるなど、「共産主義の下で起こった事象は、歴史の悲劇以外の何物でもなかった」といわれるほどの、地獄の体制をつくり、やっとそれを崩壊させたばかりだったのである。19世紀に創られたマルクス本人による理論が諸悪を生むのか、20世紀になってマルクスの理論を継承してプロレタリア革命なるものを実現化したマルクス主義者レーニンの理論と実践が地獄をつくったのか、その後継者のスターンや毛沢東が悪の体制をつくったのか、マルクスを再生をさせるためには検討、整理をすることが必要があるだろう。もともと、マルクス主義・共産主義は資本主義体制の支配者である資本家階級こそが、弱小貧者である労働者階級を搾取・収奪・抑圧・支配して窮乏化させているので、世界のレベルの最高の理性・理想の力をもつマルクス主義によって革命をして、全人民が自由で平等で豊かな生活ができようにする共産主義をつくるべきだという主張していたので、その理論的主張によって革命して創設された新しい社会が現世の地獄であったことは20世紀のマルクス主義は理論的詐欺をして世界をあざむいていたのであるから、さらに深刻な厳しい検討が必要であるといつてよいであろう。

20世紀には資本主義体制はよくもわるくも崩壊するどころが発展・拡大し、繁栄なる状況をつづけている。しかし、依然としてマルクスが批判したと同じような矛盾と欠陥をもったままである。いま問題なのは単にマルクスやケインズを批判するだけでなく、いまの体制をどうむべきかに論点を求めなければならないといえよう。

『マルクスは生きている』から『現代に生きるケインズ』への橋渡しのために

不破哲三氏の『マルクスは生きている』から19世紀最大の経済学者マルクスと20世紀最大の経済学者ケインズの恐慌対策の対比論を引用させていただいたおかげで、いきなりもっとも論究しなければならないケインズを登場させることができたのであるが、不破哲三氏に倣って両者の理論が現実を果たした功績を対比して今後のあるべきかかわりを考えておくことにしたい。

またまたくりかえしになるが、いままで延々とみてきたようにマルクスはキリスト教文化の伝統を継承しているかのように、西ヨーロッパ先進諸国の具体的な現実のなかで資本の本源的蓄積と産業革命を経てつくられた資本主義の経済構造を分析し、社会体制が資本家階級と労働者階級によって構成され資本を私有する資本家階級が労働力しかもたない労働者を商品化して搾取・収奪し、富・利益を偏在化させ、資本家はますます富み、労働者は疎外化され窮乏化すると主張をし、虐げられた労働者階級を救済・開放するためには、矛盾する経済構造が恐慌にみまわれ破綻し崩壊に向かっているため、労働者階級も自ら革命を起し資本主義を転覆させて新しい共産主義社会を築くべきなので「すべての国の労働者よ、団結せよ！」と呼び掛けていたのである。19世紀から20世紀にかけてもっとも大きな影響力をもっていたのはマルクス主義理論であったから、いずれの国の多くの労働者たちもマルクスの理論にしたがって階級闘争をし、マルクス主義政党をつくって命懸けで革命運動をすることは常態化し、とくにロシアと中国とキューバでは実際に自力で革命に成

功して共産主義政権を成立させ、第2次世界大戦後は全共産主義体制がアメリカを頭とする資本主義国家と冷たい戦争なるものをするという、全世界を巻き込む資本対労働を基盤に置くとする大闘争をしたのであり、そこに生きる人びとは自由・平等で幸福な生活をしていると思われていたのであったが、1990年前後に共産主義体制が崩壊しはじめ、冷たい戦争が終わってみると共産主義体制は、マルクスの理論とは似ても似つかない現実を創って、国民全員が行動だけでなく、考え方・意識・観念まで強制統制されているという収容所国家にいたのであり、それはある意味で奴隷以下の生活をさせていたのであった。いまマルクス主義理論に課されているのはマルクスの理論と20世紀に大勢力になった共産主義体制の現実との関係性を明確にすることであろう。

いままでニーチェとマルクスの恐慌にかかわる論理の考察にはじまって、両者の論理の性格についてもさまざまに考察してきておきながら、ここでいきなりケインズについて考えることは飛躍もはなはだしいことなので、20世紀の資本主義体制の危機を救い、資本主義体制に生きる多くの人びとを平等に豊かにさせ、大げさにいうと人類史上はじめて一国全員の国民生活を向上させ安定させ続け、公正な幸福を保障しつづけた福祉国家の基礎理論を提供し、悪といわれた資本主義を善に変えたケインズについては別稿に譲りたいと考える。

マルクス主義理論にもとづいてつくられた共産主義体制が幻であり地獄であったのに対し、ケインズ理論と社会民主主義とを統合させて構築された福祉国家は完全雇用と所得再分配制が確立して国民全員が自由で平等で豊かなしかも安全・安定した生活ができる体制を現実につくっていたことは確かだったのである。その福

祉国家の基礎にキリスト教が存在していることも次稿に譲りたい。ちなみに、恐慌についていうならば不破哲三氏もいうとおりその解決のための理論を創っているのはケインズだけであったことだけはつけ加えて置きたいし、それがなぜ2008年にもなって80年ぶりの大恐慌が襲っているのか、それ以前に世界でもっとも早く体制を福祉国家をつくったケインズの母国のイギリスがいち早く体制を崩壊させてしまったかについて等々、20世紀をかけてさまざまに論争された経済学理論を背景において考えていかなければならない。

次回へつなげるために、マルクスとニーチェと対応させて書こうと予定していたケインズ経済学が20世紀に果たした役割について、関連させて瞥見しておきたい。20世紀の中葉は一方ではマルクス主義理論に依拠するとしていたソ連を中心とする共産主義体制と、アメリカを中心とする資本主義体制とが冷い戦争をつづけていたのであるが、資本主義体制内部の経済政策は経済成長と完全雇用にも効果を発揮するケインズ理論に依拠するのが通例であり、このケインズの経済政策の成功でアメリカはソ連と対抗できる経済力をもてたのであり、ほとんど資本主義体制には恐慌が襲来しなくなったのであった。ところが、1973年のオイル・ショックによってインフレーションと失業率の上昇が同時に起きるといふ現象が出現しケインズ理論の限界が叫ばれるようになったのであり、そのため新自由主義とか新古典派経済学が復権してくるのであるが、伊東光晴氏は1970年代以降のケインズ理論の後退は経済政策を運営する政府の不手際と理論解釈の不備とされて、新たに出版された『ケインズ全集』をつぶさに検討され、政府の厳しい成長規制と不効率を生まないような保障の運用など厳しい理論適用を展開された

のが、『現代に生きるケインズ』である。2008年の金融恐慌以降の福祉国家の再建をめざして次回の課題としてこの理論を解明したいと考えている。

この理論研究のため2009年度の総合研究所の助成金をいただいている。

引用・参考文献

- 梅本克己 (1967) 『唯物史観と現代』 岩波新書
 梅本克己 (1977) 『梅本克己著作集第7巻』 三一書房
 水田洋 (1956) 『社会思想小史』 ミネルヴァ書房
 高島善哉 水田洋 平田清明 (1962) 『社会思想史概説』 岩波書店
 清水幾太郎 (1966) 『現代思想 (上・下)』 岩波書店
 三島憲一 (1987) 『ニーチェ』 岩波新書
 ニーチェ 吉村博次訳 (1983) 『善悪の彼岸』 (『ニーチェ全集第2巻』) 白水社
 ニーチェ 秋山英夫訳 (1983) 『道徳の系譜』 (『ニーチェ全集第3巻』) 白水社
 ニーチェ 清水本裕・西江秀三訳 (1985) 『遺された断章』 (『ニーチェ全集第10巻』) 白水社
 ニーチェ 中山元訳 (2009) 『善悪の彼岸』 光文社新訳文庫
 ニーチェ 中山元訳 (2009) 『道徳の系譜学』 光文社新訳文庫
 ニーチェ 手塚富雄訳 (1973) 『ツァラトゥストラ』 中央文庫
 渡辺二郎 (1976) 『ニーチェ』 平凡社
 村井則夫 (2008) 『ニーチェ』 中央新書
 西谷啓治 (1972) 『ニヒリズム』 創文社
 水上英広 (1976) 『ニーチェの顔』 岩波新書
 清水幾太郎編 (1966) 『思想の歴史10』 平凡社
 須藤訓任編 (2007) 『哲学の歴史9』 中央公論社
 マルクス・エンゲルス 水田洋訳 (2008) 『共産党宣言』 講談社
 マルクス 全集刊行委員会訳 (1961) 『資本論 (第1巻)』 国民文庫
 的場昭弘 (2006) 『ネオ共産主義論』 光文社新書
 水田洋 (1971) 『マルクス主義入門』 現代教養文庫

- 門脇俊介 (2007) 『現代哲学の戦略』岩波書店
- リチャード・ノーマン 塚崎智他訳 (2001) 『道徳の哲学者たち』ナカニシヤ書店
- Z・ブレジンスキー 伊藤憲一訳 (1989) 『大いなる失敗』飛鳥新社
- フランソワ・フェレ楠瀬正浩訳 (2007) 『幻想の過去』バジリコ
- 海野弘 (2007) 『二十世紀』文芸春秋
- 加藤周一 (2009) 『私にとっての20世紀』岩波現代文庫
- 八木誠一 (2009) 『イエスの宗教』岩波書店
- 田川健三 (2004) 『イエスという男 (第2版)』作品社
- 田川健三 (2004) 『キリスト教思想への招待』頸草書房
- 大貫隆 (2003) 『イエスという経験』岩波書店
- 滝沢武人 (2006) 『イエスの現場』世界思想社
- 小林稔 (2008) 『ヨハネ福音書のイエス』岩波書店
- 遠藤周作 (1973) 『イエスの生涯』新潮文庫
- 犬養道子 (1980) 『新約聖書物語 (上・下)』新潮文庫
- E・ルナン 忽那錦吾他訳 (2000) 『イエスの生涯』人文書院
- バート・D・アーマン 松田和也訳 (2008) 『破綻した神キリスト』柏書房
- 阿部志郎 (2008) 『人と社会』中央法規
- マイスター・エックハルト上田閑照訳 『ドイツ語説教集』創文社
- 蓮見和男 (2006) 『ヨハネの黙示録』新教出版社
- 小室直樹 (2006) 『日本人のための宗教原論』徳間書店
- 佐藤優 (2007) 『私のマルクス』新潮社
- 佐藤優 (2009) 『甦る怪物』新潮社
- 佐藤優 (2007) 『国家と神とマルクス』太陽企画出版
- 不破哲三 (2009) 『マルクスは生きている』平凡社新書
- 根井雅弘 (1996) 『ケインズを学ぶ』講談社現代新書
- 根井雅弘 (1990) 『ケインズから現代へ』日本評論社
- 間宮陽介 (2006) 『ケインズとハイエク』ちくま学芸文庫
- 伊東光晴 (2006) 『現代に生きるケインズ』岩波新書
- 佐伯啓思 三浦雅士 (2009) 『資本主義はニヒリズムか』新書館
- (この文は、総合研究所の研究助成金を受けている。)